
比例×反比例～格子点2～

さくら愛姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

比例×反比例↷格子点2↷

【Nコード】

N2441E

【作者名】

さくら愛姫

【あらすじ】

2つのグラフの格子点が交わるとき・・・「ただの二従兄妹」という、いつの間にか決め付けていたレッテルが、崩れる――前作「比例×反比例↷格子点↷」を先に読んでください。

第1話く何かが・・・？く(前書き)

この作品は、S a k u r a愛姫がペンネームのS a k u r aの部分を櫻に変えて投稿しています。

第1話く何かが・・・？く

一方、助けに来た人・・・もとい大輝は、美輝の手を引っ張ってある場所へ向かった。

その場所は、「誰にも見られたくない」という美輝の気持ちや状態を悟ったからなのか・・・カラオケの屋上付近の空室であった。

どういうコネで手に入れたのか分からない鍵で、大輝は鍵を開ける。中には、ソファとテレビだけがある、閑散とした場所だった。（その部屋は多分、予備の家具の押入れなのだろう。）

大輝は、目の前にあるソファに腰掛けて、iPodを弄り始める。
イジク

「・・・服、直せ。」

視線も変えず、大輝はそう言う。彼なりの、最大の気遣いだったのだろう。

美輝は無言で、ソファの影に座り込み、乱れた服装を正した。

その間、ずっと沈黙の空気がその部屋に流れていた。

やがて、美輝は服装をいつもの学生スタイルに戻し、大輝の隣に座った。

美輝は、ちろりと大輝を横目で見る。

iPodの画面に向けられている、綺麗で澄んだ目。高い鼻。女である自分から見ても綺麗で出来物ひとつない肌。サラサラの茶色の地毛。

・自分にはない逞しい骨格、節が目立つ手、程よく筋肉がついた腕・・・

・・・二従兄妹でも、大輝は“男”である・・・ということを、大輝には失礼だが今更になって美輝は気づいた。

気づいたと同時に、素肌を見られた・・・という単純な羞恥心が美輝の中に生まれた。

ずっと向けられている視線に、鈍感というな類に入る大輝も気づいたのか・・・「なんだよ。」とでも言いたげな目でiPodから視線を外し、美輝を見下ろす。

その目に、美輝の心臓は・・・高鳴った。

「わっ・・・ゴメン。」

美輝は慌てて視線を逸らした。でもその視線は、行き場を確定できず、キヨロキヨロ動く。

「・・・お前大丈夫かよ。」

大輝は意味深な動きをする美輝の目を見てフツと笑うと、iPodの電源を切った。

また続く沈黙。

「・・・なんでココに来たの・・・？」

美輝は、今いちばん気になっていたことを大輝に問いかけた。

「お前を助けに来た。」・・・というのが、本来の目的なのだが。そんなことさえ言えない大輝は、一度頬を指で搔くと

「・・・お前のダチの・・・篠原・・・だっけ？から電話来てさ。」

・・・と言った。まあ確かに嘘はついていない。

美輝は、「なんだあ。」という言葉と同じような口調で「ふん」と答えた。

・・・助けに来てくれたのかと思った。

そうつけたしたかったのだが・・・大輝と同様、そんなことは言えなかった。

がっかりしたような美輝の横顔を大輝は少し眺め、「本当のこと言えばいいよな。」ということを感じたのか

「・・・嘘だし。お前とアイツが一緒にいんのが——ムカついただけ。」

・・・本意を、口にした。

美輝は驚いた表情で大輝を見上げる。

丁度見下ろしていた大輝と視線が衝突し、美輝の動悸は益々上がったが・・・何より、大輝が拓海に嫉妬したことや・・・助けに来てくれたことが・・・

——嬉しかった。

それを象徴するかのように、美輝の目から大粒の涙が零れた。

そんな美輝の小さい頭を、その大きな手で包み、大輝は自分の肩へと引き寄せる。

そして美輝の涙が止まるまで・・・美輝の頭を、撫で続けた。

美輝のその涙には・・・

「嬉さ」

「自己嫌悪」

「安堵」・・・

・・・様々な感情が交差していた。

でもそれらは皆・・・大輝の手に吸い込まれて行くような・・・そんな感覚で。

やがて、その感覚は――・・・

十一十一十一十一十一

しばらくし、泣き止んだ美輝は、大輝と一緒に帰路についた。

無言で辿る帰路は・・・美輝にとって、何にも苦にならず・・・寧ろ、心地よく感じた。

家に着き、部屋に入ると・・・ケータイの着信音が鳴った。

ディスプレイには――拓海という文字。

その文字に、身の毛が全て立つような感覚に陥りながらも・・・ケータイを開けて、メールの内容を見た。

『美輝へ

今日は本当ゴメン。

幸せになれよ。サヨナラ。

P・S・店には、辞表出しといた。

拓海』

・・・それは。別れを切り出されたメール・・・

その文字を見た瞬間、美輝の頭の中には・・・「嬉しさ」と、「懺

悔」。2つの気持ちだが、同時に生まれた。

その2つの気持ちの存在に戸惑いつつも・・・鮮やかに見えるのは

“ 幸せになれよ。”

この文字だけだった・・・

その文字の中には・・・拓海の精一杯の優しさが見えて。

「・・・りがと・・・ありがと・・・拓海・・・」

・・・人とは、おかしい生き物である。

嫌いだった筈の人との別れには、決まって「ありがとう。」の言葉がすんなり出てくるのだから。

美輝はこの日やっと・・・何ヵ月もの鎖から、解き離れた。

十一十一十一十一十一

一方、入浴を済ませた少年は、ソファに座って溜息を吐き・・・その長めの髪を、クシャツと掻きあげていた。

「・・・やっぱ、ショックだったなあ・・・」

やはり、“好きな人”が他の男に素肌を見せていた・・・ということとは、大輝にとって腹立だしいことだ。

あの時・・・美輝が服装を直している時、感情が先走って襲わなかった自分が物凄く光栄で、はたまたギネスもんだ・・・という大輝の考えはさて置き。

大輝にとっていちばん気になるところは・・・拓海が存在であった。

そこだけは、自分が何をどうしても・・・存在は・・・美輝の頭の中に残る拓海の存在は、消せない。

美輝が、拓海を想っている・・・ということは、かなり低確率であるが・・・有り得る。

自分を、ソイツの代わりにする・・・ということは、かなりの確率で・・・有り得ない。

・・・低確率の“有り得る”は、願い難かった。

「情けねえ・・・」

そんな自分を、自嘲気味に笑い・・・大輝は、ソファに倒れこむように眠りについた。

十一十一十一十一十一

一方美輝は、かなり不潔だが風呂に入る気が起きず、下着と制服だけを着替え、ベッドに潜りこんでいた。

でも、頭の中で悶々と検討されるのは――大輝への気持ち。

大輝は、二従兄妹。ずっと昔から一緒にいる・・・

でも、頭を包んだあの手・・・肩へと引き寄せる、抵抗する気はなかったが、抵抗できない力・・・大輝のものだとは、信じ難かった。

今も、年少の頃も・・・大輝は、ずっと自分より劣っている奴だと思っていたのに。母親のような感情を持っていたのに・・・いつの間にか、それらは消え失せて・・・自分が知らない男になっている、とさえ思えてくる。

「・・・ワケ分かんないよお・・・」

二従兄妹以外、なんなんだっ!?

そう自分に質問してみるが・・・答えは、出てこない。
ただひとつハッキリしていることは――

――もう、自分が守る立場にはなっていないこと。守られる立場
になっていること。

そんなことに、少々不快感を抱きつつも・・・その『何か』が分か
らない。『答え』が分からない。

・・・もどかしい。数2の問題が全部解けないことよりも、悔しい・
・
・・・悔しい・・・

そう思いながら、美輝は眠りについていった。

――この時からだった。

美輝の、大輝の、2人の・・・比例と反比例のグラフが“狂い始め
た”のは・・・

でも、格子点は・・・姿を暗ませたまま、“その時”を待っている。
“その時”を逃すか逃さないかは・・・2人次第。

第1話く何かが・・・？（後書き）

『比例×反比例』裏コントく突如の第2シリーズ！？く

美輝「そもそも、なんであんな微妙なトコで切ったわけ？」

作者「いやく・・・R15の要素がひとつ出てしまいましたね・・・」

大輝「結局アイツじゃん。」

作者「・・・ま、そこらへんはスルーで。」

美輝「で、この第2シリーズ、誰が主役なの？」

作者「ええ。そりゃあもうアンタたち2人の波乱万丈な喧嘩腰の日々を・・・」

大輝「冗談じゃねえよ。コイツ喧嘩となったらマジ怖えって。」

美輝「んだと大輝いつ！オルアツ！（既に・・・へへ；）」

・・・ということで、作者の自分勝手な行動で第2シリーズにしてしまいました・・・スママセン。

第2話〈梅雨時〉

あのカラオケ事件の時の天候が、1週間しぶとく続き・・・

「・・・いつまで降るつもりなのかなあ・・・？」

美輝は、窓にベッタリくっついて大量に降り続ける雨をなんとか降り止むように努力していた。（どうやって努力するのか・・・）

そんな美輝のアホに近い行動を見ていた大輝は、大きく溜息をついて

「気づかねえの？梅雨だっつーの梅雨。」

「梅雨？あゝ、アイツかあ・・・」

大輝は、内心で「アイツってドイツだよ」とくだらないツツコみをしながら

「それよりさ、アイツ・・・拓海つつたけ？」

「え？拓海がどうした？」

「・・・何もないか？」

久しぶりに（いや、1週間ぶり）に出てきた拓海の名前に美輝は反応し、大輝の方を振り向いた。

だが、大輝はテレビに反映されている梅雨情報を凝視していた。

「・・・何って・・・別れたよ？」

美輝はまるで、「知らなかったの？」とでも言いそうな表情をしている。

そんな美輝の表情を、大輝は横目で見ながら・・・

「ふん。」

史上最高素っ気ない反応をし、またテレビに目を移した。
・・・心中、相当喜んでる・・・ということは秘密。

「・・・って、お礼まだだったよねっ」

拓海・・・という名前で、カラオケの空室での出来事も序でに思い出した美輝は、窓から離れて声を裏返しながらそう言った。

「・・・お礼？」

大輝は、一瞬「お礼」という言葉に不知感を持ったが・・・やがて、あのムカつく場面を目の当たりにした時の空気を思い出し

「・・・ああ。アレね。」

少々イラついた声でそう言った。

また序でに、告白に近い発言をしてしまったことも・・・

『お前とアイツが一緒にいんのが——ムカついただけ。』

『苛立ち』と『羞恥心』が、同時に大輝の中で交差する。

「ありがとねっ！ヒロ！」

気づけば、隣に美輝が座って、満面の笑みを浮かべている。
その声に、大輝は条件反射的に美輝の方を向いてしまった。
至近距離・・・にある美輝の存在に、大輝の動悸は途端に早まる。

「・・・それ、いつのあだ名？」

大輝はそう呟くと、赤面を隠すかのようにまた画面に向き直った。

「さあ？ 久しぶりに引っぱり出したよーな気がする」

大輝の表情そっちのけで、美輝はそう言う。

・・・実を言うと、美輝の動悸もかなり上がっているのだが・・・

お互いの、そんな動悸の高まりを認識しない2人は・・・やはり、微妙な心境だった。

でも、その心境の実態は・・・やはり、「心の拠所」とはっきり言える。

『ヒロ』

そんなあだ名を、何年ぶりに聞いた大輝は・・・あることを思い出していた。

それは・・・今のような現実ではなく、今では想像することができない・・・

——どす黒く、壮絶な過去。

その過去は、こんな『シアワセ』な梅雨時ではなく・・・『カナシイ』梅雨時だった。

第2話く梅雨時く（後書き）

『比例×反比例』裏コントく梅雨の対処法？く

作者「・・・で、結局アンタは梅雨相手に何を努力してたんだ。」

美輝「んく・・・梅雨を一心不乱に見つめて、梅雨に羞恥心を覚えさせるように努力してたのっ！」

恵夢「アンタ、つくづくなアホねえくっ！」

美輝「でもさっ！コレ意外と聞くんだよっ！台風なんか一瞬のうちに止んで・・・」

作者&恵夢「ウソつけっ！」

・・・この方法で梅雨を止ましてくれた人っ！100万ドル差し上げます（笑）

第3話〈オトナの四角関係〉（前書き）

この話では、自慰的な内容が含まれています。苦手な方はご注意ください。

第3話くオトナの四角関係く

時は、自分たちがまだ幼少の頃・・・

十一十一十一十一十一

「ヒロッ！遊ぼうよおっ！」

美輝は、大輝の元に週に最低5回、最大毎日通っていた。
そんな異様な訪問回数にも、大輝は眉ひとつ顰めないうで、喜んで遊んでいる。

誰がどう見ても、仲のいい“二從兄妹”。

そんな2人を、美輝の母・・・当時まだ無名だった麗沙レイサと美輝の父の從兄弟の拓哉タクヤ・・・つまりは、大輝の父は、微笑ましく眺めていた。

——だが、“あの事件”の問題だったのは、美輝と大輝では——
——ない。

微笑ましく見ていた——この2人だったのだ。

大輝の母・・・つまり、拓哉の妻、美咲ミサキは、学校の教師。しかも、スーパー進学校として有名な高校の最優秀教師なのだ。

単身赴任していた美咲は、1ヵ月に最高1回のペースで家に帰ってくるような毎日・・・

そんな妻を持つ拓哉の身近にいる女性と言えば・・・自分の妻では

なく・・・

——まだ無名で、仕事もハードではない“従兄弟の妻”だった。

十一十一十一十一十一

最悪な事態は、美輝が7歳3ヵ月を迎える頃。

大輝は美輝の年齢に比例するように定数を重ねて、7歳5ヵ月を迎えていた。

そんなある日。この日は珍しく美輝の家・・・神楽家に、大輝と拓哉が泊まりに来た。

「美輝ちゃん、こんばんわっ！」

「わぁいっ！ヒロだあっ！」

自分の家に初めてくる大輝の姿を見た途端、美輝は思い切り大輝に抱きついた。

「こらこら美輝。大輝君怖がっているでしょう？離れなさい。」

「やっだっ！美輝、ヒロ大好きだもん♪」

「僕もだよっ！」

・・・幼い頃は、簡単に交わっていた「大好き」っていう言葉も・・・
今となっては、「心の拠所」ということさえ、この2人は伝え合えない。

比例のグラフを伸ばしながら・・・いわゆる歳を重ねるということ
は、そんな伝え合う手段さえ失ってしまうものなのか。

そんな手段を手軽に使ってた時代は、もうこの2人の脳内には残っていない。

歳を重ねることは・・・記憶が薄れてゆくこと。恐ろしいことである。

そんな恐ろしいことを、ステキナコトに変えるのは、その人次第だ
が。

「やれやれ・・・全くこの2人は仲がいいね。」

「そうね。美輝のお婿さん候補第1位はやっぱり大輝君ね。」

「2人に“輝”っていう文字入れて正解だったな。」

親同士は、微笑みながら抱擁を交わす幼い2人を眺めていた・・・

十一十一十一十一十一

合鍵を使って水瀬^{ミナセ}家に帰宅した美咲は、冷蔵庫に張ってあった予定表に自然と目がいった。

水瀬とは、大輝の前の名字。大輝の前の名前は水瀬^{ミナセヒロキ}大輝だった。

「・・・“翔一郎”の家に泊まり・・・？」

翔一郎・・・というのは、前述の通り美輝の父。

その名前と文を見ただけで、“高校教師”の頭はフル回転する。

翔一郎の妻である麗沙は、前述通りまだ無名で、芸能界でも目だっていないかった。

が、町内・・・市内・・・いや、県内でも有名な八方美人。そんな言葉でもさえ、その美貌を表せないほどの究極美女だ。

翔一郎はこの時、IT企業の若社長という地位にいた。・・・残業は日常中の日常。絶対帰宅なんてしていない。

そんな中、美輝と大輝が早めに寝静まったら・・・神楽家は、防音

セキュリティも万全。部屋も100通り以上ある。階数も半端ない。

そして何より……拓哉は、“男”だっていうこと。

今傍にいるのは……究極美女。“女”……

時計の方を勢いよく見ると、短針は2……長針は6を差していた。そう。深夜2時半……

……心臓を抉^{エツ}り取るように……胸が痛んだ。
嫌な予感が、美咲の頭の中を駆け巡った。

美咲の足は、無意識に車の方に向かっていた。

十一十一十一十一十一

2時半……美輝と大輝は、勿論とくに寝静まっている。

麗沙は、自室のベッドに身を任せて、本を熟読していた。

本を持っている手の反対の手は——今は隣にいない夫、翔一郎のことを想いながら……

“オトナ”な時間を過ごしていた麗沙の自室のドアが……いきなり、思い切り開いた。

「きゃあっ!？」

条件反射的に“その手”は、パジャマから抜き取られる。
ドアの向こうの人物は……紛れもなく、“夫の従兄弟”だった。

「……麗沙さん……」

拓哉は、低い・・・熱を持った声で麗沙の名を呟く。
そしてそのまま、ゆっくりと麗沙に近づき・・・無理矢理、麗沙に覆いかぶさった。

麗沙の体は、まるでレイプに遭うときのように硬直し、後退りさえできなかった。

そしてそのまま、拓哉は麗沙の唇に無理矢理自分の唇を押し付ける。

「んっ・・・」

酸素を求めて、少しだけ開いた麗沙の唇を割って入って、拓哉は麗沙の口内を舌をつかって荒らす。

「ふぁ・・・あっ」

口から、麗沙の熱を持った声が漏れた。

麗沙の手から、本がパタリと音を立てて床に落ちた時・・・

「――拓哉っ!？」

「麗沙・・・?」

・・・女の、男の、声がした。

その声を聞いた拓哉は、ハッと気づいたような表情で麗沙から離れる。

「美咲っ・・・翔一郎・・・」

拓哉は、ドアのところにいる女・・・美咲の方を見る。

美咲の表情は青ざめて・・・唇さえ、青白かった。

そしてそのまま、涙を流しながら出口へ向かった。

「おい待て美咲っ・・・」

拓哉は、美咲の後を追って部屋を後にした。

残された男・・・翔一郎は、麗沙に近寄り、麗沙の唇にかかっている唾液を指で拭いながら・・・

「・・・お前・・・拓哉とヤツてんだな。」

溜息混じりで、吐き捨てるように麗沙にそう告げた。

「やっ・・・翔一郎、違・・・」

「もういいよ。——距離を置こう。」

麗沙の胸が、心臓が、弄くっていた性器が・・・ドクンと、波打つ。

『距離を置こう。』

この言葉が・・・全ての、起源だった。

十一十一十一十一十一

「待てよ美咲っ・・・」

拓哉は、逃げる美咲を追いかけていた。

美咲は道路の真ん中で止まり、きつい目線で拓哉を睨む。

「・・・だよね・・・」
「・・・え？」

その視線は、涙腺を崩す傾向を見せる。

「麗沙さんの方が美人だもんね！？私よりも長い時間一緒にいられるもんね！？そりゃあやりたいに決まってるわよねえっ！？」

「違っ・・・」

否定する拓哉の声を遮り

「・・・もういいっ・・・」

今まで、聞いたことのないような弱弱しい声で・・・美咲はそう呟いた。

悲哀に満ちた声・・・表情・・・

「だから違っってっ・・・」

道路の向こうから来る物体にも気づかない拓哉は、無我夢中で美咲の肩を掴む。

「俺はお前を愛して・・・」

語尾は・・・爆音で、かき消された。

推定時刻。3時5分。

2人が立っていたその道路は——血の海であった。

——数ヵ月後。翔一郎は企業を蹴って麗沙とは別のプロダクショ

ンに所属し・・・別のプロダクションである麗沙を奨励し、麗沙を一躍有名にさせた。――有名にさせ、仕事を増やせて、帰宅させないように。

翔一郎は、早い日。『有名IT企業の社長から華麗に転身』という見出しで、TVを飾った。

――『オトナの四角関係』という記事にも、華麗に名を轟かせて・
・
一晩を通して起こった事件は、メディアをあつという間に引きつけた。

しかし、その事件は・・・梅雨のように、すぐに掻き消されて。

第4話くずっと一緒く

「・・・あれ？お父さんは？」

「拓哉おっちゃん、いないよお？」

そんな事件の翌日・・・というか当日。何も知らない幼い2人は、目を覚ませた。

だが・・・辺りの大人は、美輝の母・・・麗沙だけ。

「お母さん、拓哉おっちゃんは？」

「た、拓哉おっちゃんは・・・」

麗沙は、目を泳がせている。

そんな麗沙の横から、翔一郎が姿を現せた。

「あ、お父さんだっ！いつ帰ってきたの??」

久しぶりに見る父親の姿に、美輝は目を輝かせて聞くが・・・

「昨日だ。大輝君・・・」

愛娘の問いかけさえ無視して、翔一郎は大輝の目線に合わせてしゃがみ、肩を掴んでその目をじっと見つめる。

「——お父さんは、死んだんだよ。」

「・・・え？」

「それと、美輝。」

大輝から、今度は美輝へと視線を合わす。

「・・・これからは、小学校を卒業するまでベビーシッターを雇う。大輝君と暮らすんだ。ちゃんと言うこと聞けよ？」

「・・・え？ベビーシッター？」

美輝と大輝。両方が途方に暮れている目をしている・・・そんな目を見て、麗沙はただただ・・・涙を流していた。

十一十一十一十一十一

「ヒロッ！学校行こ・・・」

「行かない！美輝ちゃん1人で行って！」

それから数週間後・・・大輝の両親の通夜が執り行われた数日後。大輝は、部屋に閉じ籠った状態に陥った。

「大輝君・・・いい加減部屋から出てきなさい。」

「出たくないっ！向こういけよ！」

一流ベビーシッターの島崎妃鶴シマサキヒツルの声にさえ、大輝は反論し続けた。妃鶴の言う通り、大輝はここ数日の間、部屋から出て来ない。食事もうろくに喉を通らせていなかった。

・・・僅か7歳にして、襲来した・・・途轍もない不幸。それは、ただ“不幸”という言葉では表せないことだ。

一夜にして、大輝は・・・大切なものを、失った。ヒトヨ

両親という、掛け替えのない存在を。

それがなくなった空白感は・・・日を重ねるにつれ、ただ広まるだけだった。

大輝の部屋は、鍵がかかっている。合鍵なんて、どこにもない。流石の一流の妃鶴も、どうしようもない。

ベビーシッターからも、徐々に見放された大輝は・・・どんどん衰弱するばかりで。

・・・

それから、更に数日が経った夜・・・

大輝は、自分の部屋についている風呂で入浴を済ませ、ソファの影に蹲っていた。

・・・まるで、あの被害に遭った美輝の状態のように。

一方、美輝は・・・

「・・・怖いよお・・・」

すぐ下の階の、大輝の部屋を見下ろしていた。

そこは、湿気を取り除く為に窓が開いている。

進入方法は・・・その窓を通るしかない。

美輝は、意を決して・・・窓枠に手をかけ、己の体を外へぶら下げた。

そしてそのまま、注意しながら手を、窓枠からレンガ造りの壁の隙間に入れながら下降する。

・・・下手したら、そのレンガが取れる。

そして。無事、窓の前に到着した。

窓枠に手をかけようとした、その時・・・

パラッ・・・

レンガが、少し欠けた。

そしてそのまま、レンガごと崩れ落ちようとしている・・・

「・・・いやあっ！」

美輝は、咄嗟に叫び・・・届くかどうか分からない足を、開いている窓の中に入れた。

そして、その足を揺らして助走をつけ、勇気を振り絞って・・・レンガから、手を離れた。

幸い、浴室は大輝のことを考えてタイル式ではなく、発泡スチロール式。しかも滑って転んでも痛みを吸収してくれる造りになっているのだ。

そんな床に、美輝は足ごと入り・・・新体操で鍛えた着地法で、無事衝撃も少なく着地。

「・・・怖かった・・・」

恐怖心のあまり、少量滲み出した涙を拭って・・・浴室から、出た。

「ヒロッ！」

美輝は、部屋のドアを勢いよく開けて、その名を叫ぶ。

「・・・美輝ちゃん？」

大輝は、弱弱しい声で・・・美輝の名を呟いた。
そして上げたその目は・・・隈ができていて、涙で膨れていた。

その目を見た瞬間、全てを悟った美輝は大輝の傍に駆け寄って・・・
自分よりも、少し大きいぐらいの大輝の体を抱き締めた。
でもその体は・・・途轍もなく、細くて。

「大丈夫だよ・・・美輝がいる・・・」

大輝を抱き締めながら、美輝は一言一言一生懸命呟いた。

「拓哉おっちゃんや美咲おばちゃんは・・・大輝から離れたただけだよ？ 美輝のお父さんやお母さんみたいに・・・絶対どこかで笑っているから・・・美輝・・・拓哉おっちゃんや美咲おばちゃんみたいに、ヒコから離れない・・・ずっと一緒だよ・・・」

その声を聞いた瞬間・・・大輝の中の空白感が、埋まり始める。
数日間、味った孤独感。不幸。それらも埋まり始め・・・
徐々に徐々に、それは心地よいものと変わっていった。

美輝の背中を・・・安堵の涙が濡らした。

『ずっと一緒』

その約束は・・・幾年も経った今でも、守り続けられている。
その言葉は・・・2人が描く比例のグラフの・・・“原点”となった。

第5話〈家族の権限〉

両親を失った頃の大輝には、拓哉や美咲の死因は“交通事故”とし
か翔一郎から知らせられてなかった。

だが・・・その事件は、ただの“交通事故”という文字では表せれ
ない。

そのことを知ったのは・・・妃鶴が、神楽家のベビーシッターとし
ての期間が終わりを告げ、中学1年生の時の元旦。

「・・・ヤバ。」

深夜0時。大輝は自分の寝言で目を覚ませた。

「・・・ケータイ、リビングに置いたままじゃん。」

大輝はこの日、お年賀メールをサッカー部部員全員（顧問やマネジ
ャー含む）に渡す仕来りを成すため、ケータイを目の前に置いて、
リビングで紅白歌合戦を鑑賞してたが・・・やがて厭き、「0時に
起きりゃいや。」とB型特有のマイペースな提案をし、寢床につ
いていた。

だが。肝心のケータイを、リビングに置いたまま・・・ということ
を、よりによって0時当時に気づいた。

ケータイを取りに行くため、1階までの階段を踏みしめる。
踏みしめる度・・・異様な声が、だんだん聞こえ始めた。

「・・・・・・・・っ！」

「だ・・・・・・・・ろっ！」

その声は・・・・辛うじて、正月のために帰ってきた芸能人2人。美輝の両親・・・・翔一郎と、麗沙のもの。

それは、リビングに近づくにつれ、鮮明さを増していた。

「だから、違うって言うてるでしょっ!？」

「ふざけんなっ!これ以上否定する気かお前は!」

リビングのドアの隙間に、大輝は視力Aの目を当てた。

そこには・・・・言い争っている2人の姿。週刊雑誌だったらスクープもの・・・・といっても、こんな深夜に報道陣がうろつく訳がないが。

「お前みたいな妻を持って俺は不幸だよ!」

「酷い・・・・酷いわ翔一郎!」

「酷いのはどっちだよ!・・・・こんのタラシ!」

・・・・大輝は、目を見開いた。

翔一郎の手には・・・・銀色に光る物体があるではないか!

それを“果物ナイフ”だと認識するのには、然程時間はかからない。

大輝はすぐさまドアを開け・・・・麗沙を庇うように、立ちはだかった。

いきなりの大輝の姿に反応した翔一郎は、寸止めはしたものの・・・・そのナイフは、無残にも大輝の頬の上をスイングした。

「・・・大輝君・・・？」

大輝は、頬から滲み出る血を拭いながら

「何があつたんですか？——“家族”として、聞く権限ぐらいあると思いますけど。」

いつもは、冷静でクールな翔一郎（と、大輝の中で印象づいている）が、果物ナイフを振り翳すなんて、考えがたい行為。

大輝は、落ち着いているも・・・冷たい目で、そう翔一郎に問い質した。^{タダ}

「・・・分かった。麗沙。お前は下がってろ。」

「・・・ええ。ゴメンなさい。大輝君。怪我させて・・・」

大輝は麗沙の方を向き「いえ。」と答えると、すぐに翔一郎の方に向かい合った。

翔一郎は、窓の外の風景を眺めると・・・

「・・・あれは、こんな雨の日・・・と言っても、梅雨の頃のことだった。」

「まあ、これは雨ではなくて雪だけだな。」と付け足すと、あの『オトナの四角関係』事件を、切々と語り始めた。

——・・・

「・・・そうですか・・・」

“交通事故”という死因の裏に、そんな物語があったことを始めて聞いた大輝の声は・・・途方に暮れている響きがあった。

「・・・翔一郎さんは・・・」

大輝は、翔一郎の目をしっかりと見て

「麗沙さんを、本当に好きなんですか？」

そう、問い質した。

翔一郎は、しばらく考えると・・・

「・・・一生を誓った仲だ。好きに決まっている。ただ・・・不安なだけなんだ。」

「不安？」

「麗沙は、何歳だと思うかね？」

今度は、大輝が考えた。

歳は、大輝には知らされていない。

「最高齢でも・・・23歳ですか？再婚かなんか・・・」

大輝は、思ったことを包み隠さず答えた。

13歳の息子を持つ23歳なんて、いないのだが・・・本当に、大輝の目には麗沙はそう映っていた。

「そう思うだろう。麗沙は・・・23歳で我が娘・・・美輝を産んだ。今は30歳だ。」

予想外の年齢に、大輝は目を丸くする。

「一目見ただけでは30歳とは思えない容姿を持っている麗沙が・
・また、拓哉とのように・・いや、大輝君のお父さんのように、
あんなことをしているとしたら・・不安で仕方な・・」
「・・・あの。」

大輝は、怒ったような低い声で、そう呟き、翔一郎の言葉を遮った。

「即ち、翔一郎さんは・・麗沙さんを信じてないんですか？好き
だったら・・信じるなんて、常識じゃないんですか？」
「・・・え？」

「麗沙さんは、違うと否定しているんでしょう？だったら、それを
なんで信じないんですか？」

口調は、敬語だが・・目は冷たいものだった。

“13歳の少年”は、益々目の力を強めて

「・・俺だったら、本当に好きな人は信じますけど。嫌いな人は、
信じません。」

・・ほんの数秒、2人の間に沈黙が駆け巡った。
すると、翔一郎が強張っていた頬を緩ませて

「・・やっぱり君には、完敗だ。」

俯き加減になりながら、そう呟いた。

「・・・だよな。信じなかった俺が・・バカだったよ。好きな
のにな・・逃げてばっかだった。信じてなかった。・・俗に言う、

矛盾だな。」

「・・・すみません。」

自分を自嘲する翔一郎の表情を見て、大輝はさっきの生意気に近い発言を悔やみ、咄嗟に謝った。

「いや、いいんだよ。全ては俺が悪かった。・・・すまん大輝君。帰って早々、迷惑かけてしまっただ。」

「いえ・・・」

翔一郎は、「よっこらせ」と言いながら立ち上がり、果物ナイフをナイフケースに入れる。

ケースの蓋をパタンと閉じて・・・

「時に・・・大輝君は、美輝を信じれるか？」

「え？美輝を？」

大輝はほんの一瞬、言おうかどうか迷い、複雑な表情をしたが・・・

「・・・勿論。信じれます。美輝は・・・抜殻だった俺を、救ってくれたから。」

『ずっと一緒』

その言葉が・・・彼を、救ったのだ。

翔一郎は、凛々しい表情に『相違ないな。』と思いつつと笑った。

「美輝のこと、宜しく頼んだぞ。じゃ、俺はもう東京に戻るな。」

「・・・はい。」

部屋を、後にした。

1人残されたりビングに・・・幾つもの着信音が鳴り響いた。

ディスプレイを見ると・・・

「・・・着信12件かよ。」

その着信は皆、サッカー部部員からのものだった。

「・・・年賀メール、忘れてた・・・」

雪がしんしんと降り積もる元旦・・・少年は、綺麗に年賀メールのことを忘れていた。

大輝は、黙って頭をガシガシ掻いた。

第5話〈家族の権限〉（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜ヒロLOVE度は？〜

作者「3話続けてのシビアゾーン、やっと抜け出せるような予感・
・です。今日はお忙しいところ、マルチタレントの神楽麗沙さん
にお越しいただきました。」

麗沙「こんにちは。よろしくお願いします。」

作者「では、早速質問ですが・・・幼少の頃の美輝と大輝、どれく
らい仲がよかったんですか？」

麗沙「いや〜、本当に仲がいい2人です。本当にほぼ毎日水瀬家
にお邪魔させて頂いて・・・」

作者「では、その当時の美輝のヒロLOVE度はおいくらかと」

麗沙「そりゃあもう100%中120%ですね。今もそうであって
ほしい・・・」

作者「・・・そうだったら、大変なことになりますよ・・・」

麗沙「そうですね（汗）」

2人は幼少の頃、本当に仲がいろいろっていう設定です。

第6話く知らないく

——色々あったよなあ。

大輝は、一通りの過去を思い出し、そう思った。
気づけば、横の美輝はスースー寝息を立てて寝ている。

その美輝の目には・・・隈ができていた。

「大丈夫かよ・・・」

大輝はそう呟き、その隈をそっとなぞる。

美輝は一瞬顔を歪めたが・・・すぐに、元の寝顔に戻って

「・・・ずっと一緒だよ・・・」

・・・彼女もまた、『ヒロ』という言葉を元に同じことを夢の中で
思い出しているのだろう。

そして、その約束も・・・憶えている。

そんなことにさえ、堪らない・・・気持ち溢れ出して。

大輝は、その美輝の華奢な体を強く強く、抱き締めた。

抱き締めたことと同時に、また両親を失った“カナシミ”が押し寄
せてくる。

・・・と同時に、美輝がいてくれたことに・・・堪らない・・・言
葉では言い表せないほどの“シアワセ”も押し寄せてくる。

——そんな経験をして、今、俺がいる。美輝がいる。・・・嬉しいことではないか。

当たり前過ぎて、自覚していなかった・・・

「・・・大輝？どうしたの？」

ほんの少し息苦しさを覚えた美輝は、目を覚ました。

今、大輝が取っている行動に戸惑いつつも、平静を装って——動悸を隠して、美輝はそう問い質す。

「・・・ゴメン。」

大輝は、謝りつつも・・・抱き締める力を、強めるだけ。

その力や温もり・・・それらを感じて、また美輝も・・・あの日のことを思い出した。

ずっと一緒にいると、約束したあの日・・・

約束したはずの約束は、憶えてたはずなのに・・・果たせなかった。

その証拠として・・・拓海が存在がある。

ここ数日。美輝は、拓海への懺悔のあまり・・・あまり睡眠を取れていなかった。

——もう、懺悔なんかしない。大輝がいるから・・・懺悔なんて、必要ない。

そう思っても・・・約束を果たせなかった自分を・・・大輝を、

一瞬でも1人にしてしまった自分を・・・
酷く、憎く、醜く感じ。

数分の沈黙を経て、美輝の目からは涙が零れ落ちた。

カラオケの時はともかく・・・要因も何もなく、美輝がいきなり泣き出すなんて滅多にないこと。

そういうことを、家族として何年も一緒にいたために熟知していた大輝は、「もしかして自分が要因か」と思い、美輝を離れた。

「・・・ゴメンね・・・ゴメンね大輝・・・ずっと一緒だって、約束したのに・・・」

美輝は、俯いて涙を拭いながら嗚咽混じりで一生懸命言葉を発する。

「・・・アホ。憶えてくれてるだけでいいし。・・・いずれ、別々んトコに行くだろう？俺等。」

——そう。幾年か経った時には・・・美輝は美輝、大輝は大輝の道を歩んでいるだろう。

想いを伝え合う瞬間を逃してしまえば・・・格子点は、消える。ずっと平行な・・・平行線を、2人は歩いてゆくことになる。

平行線の彼方には・・・一生を共にする、“誰か”がいる。
そして、またその誰かとのグラフを、対立させる。

・・・原点は、格子点で始まって。

しばらく経ち、美輝は泣き腫らした目で・・・でも、綺麗な目で

「・・・幼い約束って、なんか・・・虚しいね。守れる保障もない

のに・・・」

微笑みながら、そう言った。

『たとえ虚しい約束でも、この約束守りたい。』

そんな想いを、この言葉の裏に秘め。公には出さずに。

大輝は、そんな美輝の言葉に「そうだな。」と返事をする

「つかスゲ目。メツチャ腫れてるし。隈も重なって最強だな。」

「!? 何最強って! 嫌味っ!？」

「さあ? どっちでしょう?」

反論する美輝を横目にからかうようにそう言うと、大輝は立ち上がり自室へと向かう。

「なっ! バカにしゃがってこのヤロ・・・」

「あんま暴れてるといい顔が台無しだぜ? おやっさん。」

留めの一言を発すると、大輝はリビングを出た。

「おやっさんって・・・年齢層はともかく性別すら違うし・・・」

美輝は言葉では激怒を表しつつも・・・内心で、何故かホッとして微笑ましく思う。

——やっぱ“弟”みたいだからかな・・・

その清々しい感情を、“弟”という一言で済ませて、美輝は目を冷やそうと冷凍庫へと向かう。

「えっと、氷氷・・・」

氷は、冷凍庫のいちばん上にある。

そのいちばん上の氷を取ろうと、手を伸ばした瞬間・・・

「痛っ・・・」

肩に、少々鈍い痛みが走った。

・・・大輝が抱き締めたときの力が、まだ美輝の体に残っていたのである。

それを証するかのように、肩には意味深な痣ができていた。

「・・・マジで・・・？」

その痣を手で覆い、美輝は立ち尽くして考える。

——なんで、いきなり抱き締めたのだろう・・・
なんで、大輝もあの時の約束を憶えていたのだろう・・・

抱き締めた時の大輝の表情。約束の原理を語る表情。

それらは皆・・・美輝が知っているものではなくて。
知らない男のものだと思えて・・・

——自分が知っている大輝じゃなくて・・・切なかった。

第6話く知らないく（後書き）

『比例×反比例』裏コントく子供部屋く

作者「では、謎の「子供に優しい部屋」をつくってくださった翔一郎さんに、なんでそんな部屋をつくれたかを、説明してもらいましょう！」

翔一郎「・・・作者。なんでそんなコト説明しなきゃなんないわけ？」

作者「だって今回、あんまネタなかったんですもん。」

翔一郎「・・・（このアバウトめ）まあいいだろう。美輝が、この部屋に入ってもその身に危険を及ぼさないよう、全室安全セキュリティを万全にした。まあデザインは俺だけだな。」

作者「・・・新種の親バカですね・・・」

翔一郎「？子供が生まれる前に、全室リフォームするのが神楽の仕事来りなのだが・・・」

結果、特に安全セキュリティが整っている部屋のひとつを美輝の部屋、ひとつを大輝の部屋にしたそうです。

第7話　〜寒がりの少年〜（前書き）

更新遅れてすみませんでした・・・m
┌
└
m

第7話　寒がりの少年

梅雨の日の事件からは、何事なく時が過ぎ・・・
季節は、夏を迎えていた。

「ひゃーっ！あっついあっつい！太陽、休暇とってくれてもいいのにーっ！」

あまりもの暑さに、美輝は散々叫びながらフライパンで卵を炒める。

「日中最高気温40度を上回る・・・地球温暖化ってスゲエなあ。」

暑さ関係なしに、熱いブラック珈琲コーヒーを啜り、新聞を見る大輝。
そんな大輝を、美輝は化け物を見るような目で見つめ

「大輝君よ・・・感覚神経大丈夫？」

感覚神経の心配をし始めた。

「俺は極度の寒がりだってこと、もしかして気づいてなかったとか？」

心配する美輝の目を見て、大輝はフツと微笑んでまた新聞に目を落とす。

——大輝、なんか大人っぽくなった？

そうとさえ、美輝は思った。

・・・生まれた時から一緒だといっても、死ぬまで赤ん坊なわけがない。

そんなことを熟知はしているも、時間ごとに変わる大輝の表情は、やはり妙なものだった。

——いつのまにこんなに大人っぽくなったんだろう。

そう思えるのが、世の常。いつも見ているけど、時間がX軸だとすると、Y軸である姿はいつも見ているけど、途端に違って見える。

・・・比例とは、恐ろしい。

「・・・ま、今度の“旅行”の時は、気温がひと段落するってよ。」
「は？旅行？」

聞き慣れない言葉に、美輝は耳をかしげる。

そんな美輝の様子に、大輝は溜息を吐いた。

「さてはお前・・・説明会の時寝てた？」

「うん。バッチリ。体育館入った途端眠気が襲ってきてそのままスピー的な？」

「・・・柴田（美輝の学担の先生の名字）もよく注意しないよな・・・」

そう言いながら、大輝はテーブルの上に置いてあったしおりを手にとった。

「・・・ふん。交流旅行・・・4泊5日かあ。派手なことをするもんだねえ・・・」

「派手なことってオイ・・・」

美輝はまだ、高校2年生。普通、旅行と言ったら3年生がするものだと思う。

だけど豪勢なことに、1、2年生も旅行へ行くのだ。（ちなみに美輝は、1年の時インフルエンザで旅行不参加）

「今年はちゃんとインフルエンザかかなよ？」

「はい。分かってますよぉ！あんな過ちは二度としない！」

美輝は「任せとけ」とでも言いたそうに胸板(?)を叩くと

「さ〜と・・・準備準備・・・明後日出発だとは思わなかったあ〜♪」

日にちが日にち。明後日出発。無論、美輝は何も用意していない。

そそくさと、自室へ向かった。

十一十一十一十一十一

美輝が去っていった部屋の中・・・静寂で、時計の音さえ聞こえる。

そんな中、残った寒がりの少年は・・・思い切り、悩んでいた。

「・・・どうするかな・・・」

腰をソファに下ろし、天井を見上げる。

見上げても、目を閉じても・・・瞼の裏に映るのは、あの日の光景。
梅雨が明けてすぐ・・・大輝が対面のために高校へ行った時のこと
だった。

第7話　寒がりの少年　（後書き）

『比例×反比例』裏コント　何故に！？　」

作者「では、今回大輝君にお越しいただきました。」

大輝「・・・ハハ。タリイ。早く終わらせろ。」

作者「・・・（怒）こんなにもダルそうにしている原因は、次話で明らかにします。」

大輝「あゝ？　なんつった？」

作者「いえ何も」（笑）じゃ、早速質問。どうして2人は高校違うのと同じ旅行先なの？」

大輝「あゝ。俺が通ってる高校と、美輝が通っている高校は校長同士が兄弟なんだよ。面白いからって行って、行事はほとんど2校同時に実施する。」

作者「へへ。凄いねえ。兄弟校長・・・」

大輝「自称・デキトーコー適当校長兄弟。」

作者「・・・ハハハ・・・（汗）」

第8話くミィハー女く（前書き）

今回、性的用語がかなり含まれています・・・（汗）

第8話くミィハー女く

「勉強は順調に進んでるか？神楽。」

それは、梅雨が明けた頃・・・大輝は、担任の富岡トミオカと定期的に行っている対談に出かけた。

富岡は男教師。いつもジャージに笛をぶらさげている・・・という、妻子持ちの体育会系男。ちなみにかんりの美形で、妻子持ち関係ナシに女生徒にかなりモテているとの噂。

「はい。分かんないところは美・・・いや、妹に教えてもらってんで。」

『美輝』と呼ぶのは、さすがの大輝も躊躇ったのであろう。

妹ではなく、二従兄妹と言う方が正しいのだが・・・あまりもの血縁が薄く、変な誤解を招いてしまう。

そんなことを充分熟知していた彼は・・・その誤解の世界に美輝を巻き込みたくなかったのだろう。

「ほう。妹・・・神楽に妹がいたのか？」

富岡は、疑惑を抱いたように眉を顰めた。

相変わらず勘のいい富岡の様子に、大輝は内心後退ったが・・・

「・・・いえ、正しく言えば幼馴染・・・ですかね？近所に住んでる・・・アハハ・・・」

「ふん。なるほど。」

納得したようにその熱血教師は眉間の皺を伸ばし、微笑む。
俗に言う、王子スマイル・・・というものか。

「ソイツ、1歳ぐらい年下なんですけど、スンゲエ頭脳明晰で・・・
もう大学のセンター試験軽々通る的な・・・」

無論、美輝は大学のセンター試験軽々通るようなスーパー頭脳明晰
ではない。

バカでも、天才でもない・・・普通の頭脳の持ち主。
美輝より、大輝の方が頭脳は劣る。

・・・そういうことは、美輝も充分知っている。
だけど、決して大輝をばかにしたりはしない。（大輝は完璧にばか
にしているが）

そんなところも、大輝が惚れている最大の要因でもあるだろう。

「ほお。凄いな。・・・神楽、その幼馴染のこと凄く好きなんだな。

」

富岡が言ったその語尾は、ゴニョゴニョと空気に紛れ込んでしまっ
た。

「・・・は？何て言いました？」

聴力が悪い大輝には、勿論その言葉は聞こえていない。

「いや、なんでもない・・・」

富岡がそう言うと、いきなり大輝の肩をばかにデカイ手で掴んだ。
60をゆうに超す握力に、大輝は一瞬顔を歪めさせた。

「神楽。通信教育でいくら暇だといえ・・・非行に走ったらダメだぞ？お前も大人びているとはいえ、健全な高校生だ。どうしても“やりたい”というなら、避妊はちゃんとしろよ？ちゃんしないと、神楽にもその幼馴染にも負担がかか・・・」

富岡は、「やりたい」の部分を強調して熱烈と語る。
流石の大輝も、だんだん富岡がウザったく感じてきた。

「何故そんなシビアな世界な入るんですか？大体、何をやるんですか？」

大輝は、根本的な疑問を富岡に問い質した。

「おおっ！これこそ健全な男子高校生の答え！よしっ！神楽なら安心できるぞっ！最近、ウチのクラスでもドウテイ卒業したヤツ多くてなあゝ！困ってるんだよ！ハッハッハッ！」

——道程卒業したヤツ多くて、何故困る！？そりゃあ、道程を卒業したら将来的に困るけど・・・

・・・という、文字の思い違いが故に阿呆な疑問を抱く大輝。
彼の阿呆疑問お構いなしにバンバン彼の肩を叩く富岡。

これこそまさに、磁石。プラスマイナス。つまりは正反対だ。

「は、はあ・・・」

「よし！今日は終わりだっ！いつまでも健全にいろよっ！」

そう言い残し、富岡は職員用出口の付近まで行った。
だが、踵を返して

「もしするとしたら・・・本気でゴムつけろよ？」
「だから何をするんですか・・・」

大体なんだ、ゴムって。女子が髪をまとめるために使うあれか？
またもや、こんな阿呆な疑問を抱く大輝。

・・・やはり、女性経験が無の健全な男子高校生には、性行為用語は伝わらないらしい。

性行為に纏わるキーワードはただひとつ。ラブホテルだけ。

何故知ったかというと・・・中学の時の修学旅行時、バスがラブホの横を通り過ぎた際、男子生徒が大輝に無理矢理ラブホの原理を強
いれさせたためだ。

嫌でも覚えさせられた・・・という大輝本人が呟く証言から、その
男子生徒の強烈さが分かるだろう。

「よしよし。神楽は健全。完璧にな。じゃっ」

完全に、富岡の姿が消えた頃。

大輝は首を少し傾げて、生徒用出口に足を進めた。

渦めくのは、ゴム。輪ゴムと、ヘアゴムと、ゴム手袋。

——やっぱり謎だ。富岡先生。

謎めている人物は富岡ではなく、自分自身であることにも気づかず、大輝は散々富岡を変人扱いした。

十一十一十一十一十一

大輝は、運動場へ出た。

休日だからか、それとも梅雨明けでまだ地面が湿っているのか・・・部活動はどこもしていない。

茶色い土が、視界いっぱいに広がるだけだった。

「・・・あ。」

そんな運動場の片隅に、ポツンと小さく丸まっているボール。

サッカーボールだ。

大輝は、条件反射的にサッカーボールのところへ駆け寄る。

「・・・リフティング・・・」

そう呟き、彼は膝にボールを乗せて、リズムカルにボールを上げた。

ボールは、一定の音を立てて大輝の膝の上で跳ねる。

しばらく、それを繰り返していると・・・

「・・・大輝様・・・？」

高く細い、女の声がした。

振り返ると・・・美輝と肩を並べるくらいの美少女が佇んでいた。

「・・・誰？」

大輝は、眉を顰めてその女を見る。

「相楽美久サガラミクですうゝ同中だったあゝ」

ぶりっ子口調でそう言いながら、相楽美久と名乗った少女はじりじりと大輝に近づく。

ああ、美輝に名字名前似ているミーハー女がいたっけ・・・と、大輝は1人、思い出していた。

「大輝様とお逢いできるなんてえゝ美久カンゲキィゝ」

美久は、大輝の耳に唇を当てて甘い声でそう囁く。

大輝は美久の声にウザそうに顔を歪めながら、ボールをその場に落とした。

きっと彼は、中学の時の超多忙な日々を思い起こしたのだろう。

「別に。お前に会いに来たわけじゃない。じゃ。」

大輝はそう冷たく言い放つと、その場を去ろうとした。

が・・・

「待ってえゝ大輝様あゝ」

その肩を、美久が掴んだ。

「再会の記念にいゝ私と付き合いませんかあゝ？」

そして、あまりもの大胆な発言を漏らす。

大輝は一瞬顔を顰めさせたが

「冗談じゃない。お前なんかと付き合うんだったら、雌豚と付き合う方が全然マシだ。」

侮辱に近い発言をし、肩にかかる手をどける。

「・・・まあひどい・・・そんなことしていいのお？」

「ウゼエからだろ。」

とどめの一言を下し、大輝は再度去ろうとした・・・が。
次の一言で、彼の足は自然と止まった。

「・・・神楽美輝・・・」

彼女は、今までにない低い声でその名を呟く。

「・・・え？」

彼は素っ頓狂な声をあげて、振り返る。

「私と付き合わないと・・・“同棲”してるってこと、バラすよお？」

「お前、なんでそのこと・・・」

「神楽大輝ファンクラブの代表だものお！そんなこと知るのは常識だよお！」

クスツと笑う美久の表情に・・・大輝の身の毛がよだつ。

「さあ、どうする？私と付き合うか、同棲のことバラして神楽美輝を悲しませるか・・・」

「・・・同棲じゃない。同居だ。」

「どっちも同じじゃない。さあ、どうする・・・？」

・・・運動場のど真ん中・・・

大輝は、2つの選択肢に、迷った。

美輝を悲しませるか、自分を犠牲にするか・・・

自分の、日数を増すごとに気持ちが大きく膨れてゆく比例のグラフ。

美輝の、日数を増すごとに大輝の想いから遠ざかる（ような気がする）反比例のグラフ。

どっちを取るか・・・すぐには、決着がつかない。

第8話〈ミーハー女〉（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜リフティングギネス〜

作者「さて、今日は前回に引き続き大輝君にお越しいただきました！
」

大輝「さっさとトーク終わらせろ。ダリィし。」

作者「・・・（このダル男め。）ずばり！リフティングの最高記録は！？」

大輝「千回以上。数えるのダルくなったからそれ以降は数えてねえけど。」

作者「・・・へへえ。」

大輝「んだよ、その薄い反応。」

作者「だってギネスには18003回らしいもん。あんまスゴいつて思えな・・・」

大輝「黙れ。」

・・・ということで、リフティングのギネス記録は18003回らしいです。

凄いですねえ・・・私なんか、1回しただけでも膝から滑り落ちる・・・（大のサッカー音痴な私へへ；）

第9話〈独占欲〉

挙句の果て、大輝は・・・

「・・・分かった。1ヵ月だけ振り回される身になってやる。」

1ヵ月という・・・短くも、長い期間付き合うことに決めた。

——1ヵ月・・・たった1ヵ月、コイツの言うこと聞いたら解放される。美輝にも危害が及ばない。

・・・単純で、淡く脆い仮定をして。

そしてその日は、美久とメアドを嫌々交換して、解放された。

・・・この時大輝には、「解放」という言葉が神の言葉にも思えたのだった・・・

だけどその「神の言葉」は——嘘つきで。

十一十一十一十一十一

ケータイの着信音が鳴り響いた。

「・・・今日何通目かつつの。」

ボソッと、嫌味ったらしくそう呟き、渋々受信ボックスを開く。

『明後日旅行だねえ♪』

ねえヒロくん、抜け出ししない？キャハッ（●≡艸≡）』

・・・文章を見た瞬間、彼の身の毛がよだった。

「抜け出すワケないだろ。馬鹿馬鹿しい・・・」

でも、1ヵ月振り回されている身。問答無用の状態。もちろん、OKしなけりゃならない。

大輝は、重い指を動かして・・・

『いいよ。』

その4文字を打つのに、どれだけの動力を使っただろう。

もしかしたら、リフティングを千回以上するよりも動力を使うかもしれない。

「大輝いゝ！バスタオル2枚なゝいゝ！？」

送信ボタンを押そうと、また重い指を動かし始めたとき、無駄に慌てている美輝の声がした。

大輝はバツと送信ボタンを押し、ババツとケータイを背中の中に戻す。

そんな大輝の様子に、美輝は一瞬顔を顰めた。

「メール？大輝、メールなんてす・・・」

「バ、バスタオルか？だ、脱衣所の引き出しのいちばん上にありゅ・・・あるんじゃない？」

・・・大輝、テンパってるのがバレバレである。

美輝は「怪しい」と呟きながら、じりじりと大輝に近づいた。条件反射的に、下がる大輝。

「誰にメールしてんのおっ!？」

近づいた瞬間、美輝がバツと大輝の背中の裏にあるケータイを取ろうと背中に腕を回した。

大輝はそのケータイを右手に移して天井に掲げる。

「男友だよっ!」

「大輝友達なんていないでしょ!？」

何気に超失礼なことを言いながら、美輝は高く掲げられたケータイに手を伸ばす。

「ダチぐらいいるっつのっ!」

今度は、左手にそれを受け渡す。(余程美輝に知られたくないらしい)

美輝も一緒に動く。

「遊びに行ったことないじゃないっ! 父さんも心配してたよっ!」

「翔一郎さんは無駄に心配性なんだよっ!」

そう言いながら、また大輝が右手に移そうとした時・・・

ダダダダーンツ!

着信音・・・俗に言う、ヴェートーヴェン作曲の「運命」が鳴り響いた。

「・・・こんのKY野郎が・・・」

そう呟きながら、大輝はケータイを開ける。
画面を見ようと、美輝が動く。

「だから見んなって・・・」

「だって気になるんだもんっ！大輝の男子友達との会話っ！」

そんなにも、自分のことを気にしてくれたのか・・・という嬉しい
気持ちは声に出さず、美輝に見られないように彼はケータイを回す。

その間に見た、本文は辛うじてこんな内容だった。

『わあい♪やったあ♪

旅行だし・・・ヤッちゃう？（●≧艸≦）キャハッ』

こんな・・・おぞましい内容。

ヤッちゃう？発言のおぞましい気持ち。

美輝が気にしてくれたことの嬉しい気持ち。

メールを見られたくないという、自己中な気持ち・・・

たくさんの気持ちが交差して・・・大輝は、溜息を吐いてケータイ
をパタンと閉じた。

「・・・これ、男友じゃなくて彼女。」

「・・・え？」

美輝の顔が一瞬曇ったのは・・・大輝には、見えなかった。

「・・・そーなんだっ！おめでとっ！とうとう大輝にも春が来たか

あ
♪
」

代わりに、こんな言葉が大輝の耳に残酷に響く。

「旅行中にヤッちゃう？ってメール来たんだけど・・・ヤッたら犯罪じゃね？」

「・・・は？」

美輝は、思い切り顔を歪めた。

「それは自分や相手の所為で、法律には影響ないよ？」

「・・・なんで？ヤッたら犯罪じゃん。捕まらないとおかしいぜ？」

いつのまにか膝の上にいた美輝（ケータイを取ろうと暴れた為）は、いつのまにか大輝の横に座っていた。

そして、その言葉を真剣に聞く。

「・・・もしかして、大輝ヴァージン？」

美輝の真剣な問いかけにも

「んだよバンジーって。」

彼は結構本気でそう問うた。

美輝は溜息を吐いて・・・

「あのね、ヴァージンってHしていない人のこと。やるってHのことだよ？」

すらすらとそう述べる彼女の言葉に、まだ彼のハテナマークは消え

ない。

「やるって、殺^ヤることじゃ・・・」

「全然違う・・・」

あっさりとは、否定された。

そりゃあ、殺^ヤったら犯罪ものだ。

「・・・マジかよ。嫌じゃん・・・初経験が好きでもねえヤツなんて・・・」

「・・・大輝、その発言女っぽい・・・とゆーか純情乙女だね・・・」

さすがに美輝は、大輝に呆れた。

大輝でも、“一応”高校生。それぐらいの知識ぐらい、身についているはずだとばかり、彼女は思い込んでいたのだから。

「・・・ていうか。なんで“好き”でもないのに“彼女”なの？」
「・・・」

「美輝を天秤にかけてる」・・・なんてことは言えない。
大輝は押し黙った。

「・・・まあ・・・一種の脅迫？そんな感じ・・・」
「変なお。付き合うのって、好きな人とするもんだよ？」

そう言い、美輝はよっこらせと腰を浮かせた。

「じゃ、私準備に戻るね」

美輝はそそくさと、脱衣所にバスタオルを取りに行く。

彼女の足音の余韻が消えた頃。

「・・・好きな人って、お前なんだって・・・」

それは・・・誰に言ってるのか分からない、八つ当たり。
伝えたいのに、伝えれない情けない自分に対しての自嘲。

——時が経つほど、伝える術^{スベ}を失ってゆく。

『だいすき。』

幼い頃は、こんな言葉を毎日のように交し合っていたのに・・・
今となっては・・・この有様。

『好き』『愛してる』『誰にも渡したくない』

そんな言葉の重みが分かってきたことの証拠なのか・・・

年を重ねる度、術を失ってゆく。

年と比例するように、術はどんどん姿を暗ませる・・・

比例は、オソロシイ。時に術を失ってしまうのだから。

十一十一十一十一十一

「・・・彼女、いたんだ・・・」

美輝は1人、誰もいない脱衣所の壁に凭れかかってポツンと呟いた。

好きな人と、付き合う。

そんな図式が、美輝の中でできている。

大輝は実際、そんな図式から外れているものの・・・恋人がいるとは、確か。明確である。

というか、美輝自身も・・・その図式から外れていた。

「大輝・・・ほんとにヤツちやうのかな？」

大輝は、昔から“根は”優しい人だ。女の頼みは、聞かざるを得ないと思う。

その頼みが、犯罪であれ・・・最後には協力ぐらいするだろう。

そう自覚すればするほど・・・何かが美輝の中で込み上げてくる。

——何？これ・・・

それは、『嫉妬』『哀れみ』『羨み』『独占欲』・・・何もかもが交差している。

何もかもが交差して、大輝という存在が浮き出してくる。

「大輝は、関係ないはずなのに・・・」

そう呟くものの・・・実質、関係あった。

『ずっと一緒』

そんな約束を交わした関係。

その約束は、おぼろげだったものの・・・嬉しかった。輝いていた。

——何故？

同時に・・・哀しかった。手放してしまったから。

——大輝は、関係ないんじゃないの？

関係と、引き離せない大輝という存在・・・

——ドウシテ、ヒキハナセナイノ？

何もかも・・・自分では分からない。

「・・・なんでだよ・・・」

美輝はその場に泣き崩れた。

涙腺のせいで、滲む記憶の中・・・最終的にはつきりしている想いは

——ハナレナイデ・・・ソバニイテ・・・——

そんな・・・独占欲。

第9話く独占欲く（後書き）

『比例×反比例』裏コントく神楽大輝様ファンクラブく

作者「今日は、今後厄介な人物になる相楽美久さんにお越しいただきました！」

美久「・・・どーも。」

作者「・・・（素っ気ねえ！）じゃ、早速質問。大輝のファンクラブって何してんの？」

美久「・・・追っかけ。盗撮。」

作者「・・・（おっかねえ！）じゃ、じゃあ、クラブのメンバーは！？」

美久「・・・約300名。」

作者「・・・（どんだけえく！？）す、凄い人気だねえ、大輝・・・」

美久「呼び捨てにすんなつーの。馴れ馴れしい。超ムカつくし。」
作者「・・・（お前の方がムカつくし！）」

約300名のファンクラブの会長、相楽美久。

今後の美久に、要注意してください・・・

第10話 Square heart

——「二従兄妹」なのに、なんでこんなに傍にいて欲しいと願うのだろう。

涙腺はだんだん引き締まり、意識がはつきりしてくる中・・・美輝はそう疑問に思う。

美輝の中で・・・大輝の存在は、確実に「二従兄妹」という単純な名称の場にいることは・・・なくなっている。

そう彼女が自覚すればするほど・・・「なんで？」という未知症状に陥ってしまうのであった。

十一十一十一十一十一

一方、健全な男子高校生はケータイ片手にうんうん唸っている。

——俺、大変なこと目の当たりにしてる？

「やる」という語源を、初めて知った大輝は、混乱していた。混乱して、必死に悩んだ末・・・

「・・・こうなったら、ダミーを使用する・・・か。」

非常に危険度の高い選択をした。

それは・・・ダミー（仮身）を使うこと。

今から特注ダミーを注文すれば、明後日には間に合う・・・

大輝は、早速注文をしに「ダミー開発所」へと向かった。

そして、日にちは飛ぶように過ぎ・・・

「・・・当日になった・・・かあ・・・」

美輝は、スーツケースを部屋の外へ出した。

部屋の外へスーツケースをさらすと、やはり当日という言葉の重みが押し掛かる。

「・・・あゝ、重^{おも}え・・・」

低い呻き声がし、美輝はビクツとなって振り返る。

視線の先には、美輝用のスーツケースよりはるかに大きい・・・大輝の等身大もののスーツケースがあった。

「な、何その大荷物・・・と、等身大だし・・・」

彼を見るなり、彼女は未知の感情を思い出す。

しどろもどろにそう問い質した。

「あ、これやる用のダミー。特注で注文したはいいものの・・・なんで俺って、こんなに重いんだ？」

大輝の身長どころか、体重もそっくりそのまま人形にしてある。まさに分身。

彼はスーツケースをバンバン叩きながらそう言った。

「お、重いに決まってんじゃないっ！大輝、体重55・3キロっしょ！？」

「お前・・・俺のいちばんの最高体重もらすなっ！しかもなんで知ってんだよ」

・・・それは、美輝が大輝の身体計測結果表を失礼を承知で鞆から抜き出して拝見した為である。

「・・・ま、まあ、予想？てゆうか男子って太っても気にならんくない？」

「気になるんだよ、俺は。あゝ、重・・・」

・・・ここだけの話。大輝は体脂肪率が引き締まった筋肉質の外見と反して平均より微妙に高い。
なので毎日筋トレに励む日々を送っているのだ。

「は、半分持とつか？」

「いや、いい・・・分解するの、さすがに怖いし。」

そんな会話をしながら、2人は別々の学校への道を辿っていく。

十一十一十一十一十一

学校で注意事項を一通り聞いた後、エアポートへのバスに乗り込んだ。
だ。

「楽しみだねえー！旅行！」

美輝の隣に座っている恵夢は、もはやウハウハ状態で麗沙の曲を聴

いている。

「あ、この曲麗沙の新曲！ずっと前、一緒に行けなかったでしょ？
レンタル屋！」

「え？あゝ、あの時・・・」

美輝の頭の中は、「大輝の彼女」のことでパンクしそうだった。
だから、恵夢の言葉も失礼を承知で聞き流している。

「そんな時買ったんだよねー！聞いてみなよっ！新曲！」

恵夢は、美輝の耳穴の中に無理矢理イヤホンをねじ込んだ。

しっとり系なメロディとともに流れ込んできたのは

『Square heart 4つの気持ちが交差する時
4人の運命サダメが決まる

Square heart どんな運命でも
Oh mine lover 共に乗り越えて
そんな儚い願いを灯しながら
とめどなく交差するSquare heart』

美輝は、瞬時に思った。

——あの事件のことを、綴ったんだな・・・
大輝が言っていた、そんなことを。

「・・・母さんにしては珍しいバラードだね。」

美輝はそうコメントし、もう目の前に来ているエアポートをボーッと見つめた。

S q u a r e h e a r t

そんな状態になったときの、どう取ればよいかの行動を考えながら。

・・・結論は出たものの・・・

S q u a r e の頂点に位置する人物は、思い描くことが出来なかった。

第10話 Square heart (後書き)

『比例×反比例』裏コント〜ダミー〜

作者「では、ダミーはどうやって作られるのか、職人さんAに来てもらいました!」

職人A「今日Bは来ていないのだが、よいか?」

作者「全然、問題ナッシング〜! ってゆーことで、ダミー完成までの道筋を教えてください!」

職人A「う〜ん・・・まず初めに、届いた写真を分析して、脳ミソを味噌で形成し、目は魚の目を着色して使用し、唇は鱈子タラコで造り、心臓は鳥の心臓を使用し、筋肉は鳥の肉を使用し、心臓には操作器具を押し込んで、性器の部分は・・・」

作者「ギャー! 気色悪い〜! もういい! もういいよ! とつとと帰った! ギャー! キモいキモいキモい〜!」

職人A「よ、呼んだのアンタじゃないですか・・・」

今後、キモダミーがどうやって動くのか・・・必見です!

第11話〈飛行機〉（前書き）

今回、ギャグ重視です・・・適当です・・・

第11話〈飛行機〉

エアポートに着き、バスの中にいた生徒は全員外へ出た。

「キャーッ！エアポートー！久しぶりっ！」

出て早速、大きな声で騒ぎ出すA子。

「・・・旅行なんて、3年生だけで行けばいいのに・・・」
着いて早々、ブツブツ愚痴るB子。（飛行機恐怖症らしい）

「オ、オエエ・・・吐く・・・」

・・・とだけ呟き、トイレにダッシュするC君。

など、様々な人たちがエアポートで大輝の学校・・・須田高スダコウのバス
が来るのを待っていた。

そんな中、美輝は・・・

「ハア・・・」

4つの頂点に立つ人物について自問自答していた。

——1人が、私だとしたら・・・あと3つは誰か？

恵夢だろうか・・・いや違う。恋愛バトルにだけはなりたくない。

騒がしいA子か？いや勘弁。B子・・・暗すぎる。C君・・・嘔吐
物で大変そうだ（関係ない）

「おっ？美輝？」

ずっと自問自答する美輝の目の前で、恵夢の手が振られた。

「え？あ、何？」

我に帰り、美輝は恵夢の目を見る。

「大丈夫？ていうかコレ、マジでかわいくない!？」

そう言い、恵夢が差し出してきたのは・・・怪物フラ○チェンのマスコット。

誰がどう見てもカワイイの力の字も発せない。

「あは・・・そーだね・・・」

美輝は引け気味にそう言うと、差し出された怪物フラ○チェンのマスコットをそっと引き戻した。

・・・と、その時。

「あつ、あれって須田高じゃない？」

恵夢が気づいたように窓の外を指差した。

・・・確かに、目の前にははっきりと須田高のバスがあった。

「ほんとだ。意外と早いね。」

「い、意外とって・・・」

2人は怪物フラ○チェンを柵に戻し、土産屋を後にした。

外に出ると、ぞろぞろと須田高の生徒がエアポートに下りている。これまた、騒ぐ人やトイレにダッシュする人など、様々・・・そんな最中。

「じゃー、班長は点呼取れーいっ！トイレに行って○○（ピー）吐いてる奴ぁいるんだっ！、すぐにワシんに報告するよーにー！」

悠長な校長の声が響いた。

これじゃあ^{デキトーコーチョー}適当校長ではなく、^{ユーチョーコーチョー}悠長校長である。

「全く・・・なんであの校長、○○（ピー）吐いたとか普通に言うんだろ・・・」

「だよね。○○（ピー）吐くなんて、しょうがないことなのに・・・」

2人はぶつくさ言いながら、班長の元へ急いだ。

点呼を取った後、いよいよ飛行機の機内に入る。

機内の席順は、至って適当。つまりは班行動完全無視。

その代わり、他校の異性の生徒同士で席を組め・・・とのことだ。

（校長伝授）

「えっと・・・他校男子・・・他校男子・・・」

美輝は早速、須田高の男子を探し始める。

1人は顔が崩れている者。

1人は髪が爆発している者。

1人は体中にニキビや吹き出物がある者・・・

日頃・・・いや常に「容姿端麗」「運動神経抜群」・・・つまりは（頭以外）「完全無欠」な男（つまりは大輝）を見ている美輝には、そんな大変失礼な感想しか抱けなかった。

「・・・オイ。」

1人キヨロキヨロしている美輝の頭を、何かが小突く。

「何よ？」

美輝は小突かれた部分を軽く摩りながら“ソイツ”を見上げた。

目に飛び込んできたのは・・・

「・・・フラー○チェーン!!!!」

そう、まさしく怪物フラ○チェンだった！

思わず叫んだ美輝の声に、公衆は一気に振り向く。

「アホかお前！云^{ウン}十年顔見てるだろーがっ！」

声を聞き、美輝はやっと初めて、その正体が怪物ではないことに気づく。

「・・・カグラヒロキクンデスカ？」

片言でそう聞くと、大輝は溜息を吐いて

「女に襲われてた・・・ここしか助かる場所ねーし。」

大輝は、出入り口を親指で差す。

・・・大量の女子が、一心不乱に大輝を見つめていた。

「・・・はは・・・さすがモテ男・・・」

「あんま嬉しくねーし・・・あっち着くまででいーから匿^{カクマ}え。」

そう言い、大輝は美輝の細い手首を引いて左のいちばん前の席へと向かう。

「ちょ、それって人に頼む態度!？」

表面上、美輝がそうやって反発するものの・・・心のどっかには、「別にいいけど」っていう気持ちもあった。

・・・そんな訳の分からない気持ちに胸をときめかせてた矢先・・・
ケータイのEメール着信音が鳴った。

「ん?メール？」

こんな時、誰からだろう・・・

そんな疑惑を抱いて、受信BOXを開いた。

『To: 美輝

明日ぐらいにジェット雇って行く。

ダミーの充電頼む。

From: 大輝』

「・・・っていうことは・・・」

美輝は恐る恐る、大輝の方を向く。

彼は虚ろな目をしていて・・・まるで、人形のような。

美輝はそんな彼の唇を周りに（充分警戒心を持って）そっとなぞり、

チロツと舐めてみた。

「・・・タラコ鱻子・・・やっぱり・・・」

・・・その後、美輝の超罵声が響き渡ったのは言うまでもない・・・

第11話〈飛行機〉（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜怪物フラ〇チェン〜

作者「・・・で、怪物フラ〇チェンってなんなんだ？（ジダオ代表

作者:じ）」

美輝「えっと・・・まあ気持ち悪いっ☆顔とか有り得ないし♪」

作者「・・・そうですか・・・」

気になる人は、検索してみてください！

ヒントは「エ〇タの神様」ですよ♪

第12話〈新たな、前途多難な恋〉（前書き）

更新が滞ってしまい、すみません・・・

第12話〈新たな、前途多難な恋〉

飛行機で移動・・・といっても、海外にいくわけでもなく、飛行機はすぐに着陸した。

周りの者は皆、着陸場所の風景に感嘆の声を上げている。

「疲れた・・・」

そんな皆の中、ただ1人・・・美輝だけは、大変疲れ切った顔をしながら溜息を吐いている。

「ここからは自由行動だぞーいっ！7時にホテルで夕食！それまでにはホテルに着いとくよーにーっ！以上ー！」

遠くでは、デキトーコーチョー適当校長がそう叫んでいた。

「大丈夫？美輝。先ホテル行って休んどく？」

「あゝ、うん・・・そうする・・・」

美輝の顔は最早怪物フラ○チェン状態。せっかくの顔立ちが台無しだ。

ちなみに大輝ダミーは充電を済ませて所属の班で楽しく時を過ごしていた。

地図を辿ってフラフラとホテルへ向かった美輝。

目の前に立ちはだかるのは・・・

「・・・デカッ。」

おおよそ30階立ての、レトロ風な・・・どこか“あの店”に似ている外見の、とにかくデカイホテルだった。
あの店とは・・・そう、『ЯЁХКАЯ』。

あの日の―――壮絶な・・・悪夢があった場所。
大輝へ対して、ただの『二従兄妹』という感情は、微かだが失せた場所。

美輝は、息を飲んで・・・入口を潜った。

入口に入ると・・・内装までも、あのカラオケ店と同じレトロ風であった。

あの光景が蘇り、美輝は身震いしたが・・・それを抑え、フロントにて鍵を貰った。

鍵を持って、鍵番号の部屋へとエレベーターを使って移動をする。
ちなみに美輝の部屋は、最上階のスウィートルーム。10名限りのスウィートルームで、校長お手製のクジにて抽選を行い、見事美輝がスウィートルームの一室を確保したのだ。

いざ、鍵を開けて中に入ると・・・ガラスのテーブルに、ステンドグラス調の窓。

何もかもアンティークガラス。でもスウィートルーム的な雰囲気醸し出していた。

「・・・休養・・・とにかく・・・」

・・・そんな部屋に歓喜や感嘆の声を出す前に、美輝は休養という手段を取った。
すぐさま美輝はクイーンサイズのベッドに移動すると・・・

「ターラコーターラコー・・・クチビルータラコー」

意味不明な歌を歌いながら、睡魔の襲来に身を任せた。

十一十一十一十一十一

「What do you like, steak or salmon?」

「Why do you speak English?」

「It's mine pride.」

「Sorry. Uncle mean.」

一方、大輝は大分決心がついたのか・・・1日早くジェットを雇って、空を飛行していた。

ジェットの運転手は日本人のはずなのに、英語を使う不思議な人だった。(しかも何故スチュワーデス的にステーキと鮭どちらが好きかを聞く・・・)

——どうやって、狭間から抜け出すか・・・

狭間とは、美久の言葉なのだろう。

大輝はまだ、云々(ウンヌン)と悩んでいた。

十一十一十一十一十一

「んん・・・?」

美輝は、ようやく目が覚めた。

すぐに寝たため、髪はグチャグチャ。服も涎かなんかで湿っている。

「ヒド・・・」

ガバッと起き上がり、時計を見てみると・・・夕方の4時。そろそろみんなが帰ってくる時間帯だ。

美輝はユニットバスに入り、部屋着に着替えて何か飲もうとカフェへと向かった。

長く、赤い絨毯が敷かれている廊下。その廊下の突き当たりを右に曲がると、カフェがある。

先日にも美輝がインターネットでこのホテルの名前を調べた際、カフェの豪華な情景が画面にあったのだ。

「失礼します。」

美輝は無頓着にそう言うと、カフェのドアを開けた。

・・・中には・・・

「・・・美輝？」

あの日の・・・あの日の少年が、厨房で調理をしていた。

「・・・拓海。」

何ヵ月かぶりの再会に、2人の間に異様な沈黙の空気が流れる。その空気を破ったのは、拓海だった。

「久しぶり。そういえば旅行だっけ？この期間。」

拓海はそう呟きながら、美輝の隣へと来る。
条件反射的に美輝の体は後退りをした。

「大丈夫。何もしねえよ。」

彼はフツと笑みを浮かべると、客席のひとつに腰を下ろした。
ホッとした美輝は、拓海の目の前の客席に座る。

「・・・学校は？」

「あゝ、まあ退学？？」

彼はサラリと何食わぬ顔で重大なことを言った。
驚いたように、目を見開いてこちらを見る美輝を見て、彼はフツと
笑みを零した。

「俺が何か仕出かしたわけじゃねえんだ。前、俺が経営してた店と、
ここが合併して、仕事が為に強制的に退学・・・ってところ？」

「あ、なるほど・・・」

「それに・・・」

そう言いかけ、彼は口を噤んだ。

「それに？」

「・・・いや、なんでもない。」

「・・・お前を、忘れたかった。」そう言おうと試みてみたものの、
・・・“想うが為”、告げれなかった。

その後、間を浸すのは沈黙・・・

拓海のポケットから、ケータイの着信音と思われしき音が響いてきた。

「ちよいとゴメン。」

彼は席を立ち、スタッフルームへと姿を消す。どうやら電話のようだ。

美輝は好奇心に駆られ、拓海の後をこっそりつけて・・・スタッフルームの壁に耳を当てた。

「あ、もしもし？麗沙？うん、俺。そっちどーよ？そか、大変かー。だよなあ。で、何？？もしかして風邪とか引いた？お前体弱いから気いつけ・・・」

聞くからに、恋人同士の会話。

「ちゃんと自分を諦めてくれた。」という何とも心地よい安堵に包まれた美輝は、そっと耳を離れた。

「一件落着・・・ってどこかな？」

残るは、大輝が着くまでのダミーのお世話・・・これからまた忙しくなりそうだ。

美輝は意気を込めて、部屋へと急いだ。

部屋へ帰る途中、さっきの微笑ましい会話を思い出し、美輝自身の顔も綻ぶ。

——拓海、きつと“その人”のことすっごく好きなんだなあ・・・

・・・と、考えた時・・・頭の中を、フツと何かが過ぎった。

その過ぎったものは・・・言葉は・・・

「――麗沙・・・？」

第12話〈新たな、前途多難な恋〉（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜滞りまくりっ！〜

作者「え〜、だらしないことに・・・更新、見事にストップしてしまいましたよ・・・」

美輝「ほんまアホやあっ！てか、更新待ちしてくれてる人少ないだろうけど〜♪」

作者「んなコト分かってるよおっ！（自棄泣^{ヤケ}；）テストが明後日明々後日明々々後日と続くので・・・次回更新が、土曜日ぐらいになるうかと・・・」

美輝「でもさあ、アンタも一応中学生なんだしい〜、どっか遊び行きたいんじゃないの〜？」

作者「よく分かってるね・・・というか半ば頼まれたら行かなきゃなんねえって感じ・・・」

美輝「要するに、頼まれごとは断れない性格ですな（笑）つか、アンタ私のコーハイじゃん？」

作者「・・・」

今思えばそうだった・・・（――）コイツの設定高校生だったっけ・・・（ボケすぎっ！）

にしても、滞っている間のテスト勉強は睡魔との闘いでした（笑）

第13話〈メールの騒がせ〉

少女の体中の血管が、瞬く間にドクドクと波打ちだす。

・・・ウソだ。ウソだ・・・

そう幾度繰り返しても・・・あの声色、「麗沙」と呼ぶ声。それらは皆、恋人にしか向けていないと思うものばかりであることが、真実を物語っている。

とりあえず、その場では「別の名字を持つ麗沙さんかもしれない。」と、朦朧とする意識の中で決め付けて、あとは何も考えずにフラフラと部屋へ戻っていった。

「あ、お帰り、美輝。」

部屋では、恵夢が寛クッロいでいた。

恵夢の横では、同じ班である曾我部綾香ソガベアヤカと、花原郁美ハナハライクミが、楽しげに会話を交わしていた。

即ち、班内では曾我部と花原、美輝と恵夢という風に、班内でグループができている・・・という、なんとも悲しい現状。

「ゴメンよ恵夢・・・1人にしっちゃって・・・」

「いやいや、大丈夫。丁度寝起きだし。」

そう言って、彼女は冷蔵庫に完備されてあるスポーツウオーターを口にした。

「それより、大輝君は大丈夫なの？」

キャンプを閉めて、恵夢はそう美輝に聞く。
美輝は考える素振りを見せて

「明日、自家用ジェットでホテルに行くらしいよ。」

「じ、自家用……」

恵夢が口をあんどぐり開けていると……美輝のケータイの着信音が
鳴り響いた。

開けると……Eメール受信1件。大輝からのものだった。

「？　　なんだろ……」

そう呟きながら、受信BOXを開く。

『T o . 美輝

今、お前のいる県に到着した。

いずれホテルに着くだろうから、ダミーの呼び出し頼む。

F r o m . 大輝』

「つて、1日早く出発したんかい！」

急いで、美輝はメールの返信内容を打ち込んだ。

『T o . 大輝

そりゃビックリだ！

ていうか、リモコンで呼び出しとかできんの？

探しに行くの、疲れるし、めんどいよおー←←（××）

From: 美輝

返信ボタンを押して、10秒もしないうちに、また戻ってきた。

『To: 美輝』

悪い。リモコン行方不明。

From: 大輝

内心、納得しながら、また返信をする。

『To: 大輝』

うなずけるかも・・・（笑）
分かった。ダルいけど呼び出し行ってきますよ。

From: 美輝

返信ボタンを押すと、床から重い腰を上げた。

「んじゃ、ちよっくら出かけるけど・・・恵夢、また1人にして大丈夫？」

「え！？あ、うん。全然OK。行っただっしやい。」

普通の子なら、散々喚いて引き止めるだろうけど・・・恵夢はいつだって、すんなり承諾してくれる。

そんなところが、レズじゃないけど大好きなんだ。

心の中で恵夢に感謝を讃えながら、部屋を出た

第13話〈メールの騒がせ〉（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜次回は・・・

作者「緊急忠告！ですが、次回ヤバいことになります・・・」

恵夢「えっ！？ヤバ！？ヤバいの！？どんな！？どんなあっ！？」

作者「落ち着け恵夢・・・（汗）」

恵夢「やっぱ麗沙様絡み！？」

作者「さあ、どうでしょう？」

恵夢「美輝と大輝君がどーにかなっっちゃうの！？」

作者「さあ、どうでしょう？」

恵夢「大輝君と美久ちゃんが○×△！？」

作者「さあ、どうでしょう？」

恵夢「どれも有り得るなあ・・・」

同時UPした第14話も、是非見てください！

第14話〈イルミネーションの今宵〉

「Welcome aboard・・・」

「もういい。これは旅客機じゃない。」

一方、大輝は英語好きなジェット運転手の言葉にうんざりとして
いる。

頬杖をついて、ジェットの窓から外を見ると・・・キラキラしたイ
ルミネーション。美輝がいる県だ。

「・・・自由行動、一緒に回りたかったな・・・」

聞こえるか聞こえないかの独り言を発し、彼は小さく溜息を吐いた。

それもそのはず・・・美輝と大輝が一緒に住んでいるという、疑わ
れしき事実が誰一人として知らない。知っているのは、恵夢ぐら
いだ。

だから・・・自由行動で、一緒に回るなんて、いかにも疑われる。
他人にどう思われているのかを重視する美輝にとっちゃあ、不安の
長物。

美輝を、不安にだけはさせたくなかったのだ、彼は。

現に、散々美輝を不安がらせているけれど、そんなことまだ子供で
知識が少ない大輝には察知することができなくて。

「ご到着いたしました、大輝様。」

「ああ。運転ご苦労。やっと普通の日本語喋ってくれたな・・・」

運転手の初めて発した日本語に感動する大輝。
着陸した場所は・・・

「じゃあ、お気をつけてホテルに行ってくださいませ。」

「ああ。運転ご苦労。」

大輝は、輝かしい気持ちでジェットを見送った。

「さて、ホテルに行こうか。」

そう言い、踵を返した彼の目に映ったのは・・・

「ここどこだよ！」

そう。着陸した場所は・・・イルミネーションがギラギラ照り輝いている街の情景とは裏腹の、無人の草原が茂っている丘だったのだ。とりあえず、カッコ悪いが美輝を呼ぼう・・・としてケータイを取り出したが、見事に圏外。

「マズいな、こりゃ・・・」

いつそのこと、初の野宿でもするか・・・

そう思いながら、寝床を探していた時・・・

「・・・あれえ？大輝い？」

背後から、高い女らしき声がした。

大輝が、ゆっくり振り返ると・・・その目に映ったものに、大輝は大げさに顔を歪ませ・・・

「・・・ゲッ。美久。」

目の前にいる、憎たらしい女の名前を呟く。

「こんなところで何してるのおく？」

そう言いながら、じりじり近づいてくる美久。
条件反射的に、後退りをする大輝。

「まあ、丁度いいか☆ここ、誰も来ないし・・・ね?？」

そう言い・・・美久は、大輝に飛びかかった。

大輝は倒れ、美久はその上に覆いかぶさる。

「いや、待てちょっと・・・落ち着け? な? 俺らまだ高校生・・・」
「もう高校生でしょ? セックスぐらい、普通だよく」

にんまりする美久の顔に・・・大輝の脊髄セキズイに、リアルに何かが走る。

——ああ、悪寒の真意を知ったようだ・・・

こんな時にも関わらず、彼はそんなくだらないことを考えていた。

「だからあ、今宵はじっくり楽しもおく」

美久は、徐々に大輝に唇を近づける・・・
触れ合うまで、1センチとなったところで、どこからか奇妙な機械音が聞こえてきた。

「ハンケイ 10キロメートル イナイ デ カグラヒロキ ハッ
ケン タダチニ キュウジョ キュウジョ。」

飛んできたのは・・・ダミーだった。

ダミーは、美久の頭に思い切り頭突きをする。

美久は奇声を上げて、その場に倒れた。

「ミク ノ セイメイ ケンザイ スナワチ ミヤク アル。 ジ
ブン ヒトゴロシ ニ ナッテ ナイ。」

——充分人殺しだろっ！

大輝は心の中でツッコみをいれて、ダミーの太股にあるスイッチを切った。(なぜ太股?)

「あ、大輝！大丈夫!？」

「・・・美輝。」

息を切らせて走ってきたのは・・・美輝だ。

「なんかいきなりダミー騒ぎ出してさ！させるがままにしてたら、
この明日壁ノ丘に・・・って、この人が大輝の彼女？」

美輝は美久を指差してそう問う。

大輝は軽く溜息を吐いて

「そうだよ。」

そう答えた。

美輝はしゃがんで、美久の顔をじつと見つめる。

見た瞬間・・・美輝の中で、何かが切れた。

「可愛い人だね！大輝とお似合いかも〜！」

思っていない言葉が、喉を通して・・・口から出る。

「それにすごいスタイルいいし！めっちゃカワエエ！」

——スタイル悪いし、めっちゃブサイク。

「もう大輝とヤッちゃってるんじゃないの？」

——まだどうせ未遂でしょ。

「もしかして、野外でやるって計画だった！？だったら邪魔してゴメンね！」

——ヤンナイデ。

気持ちと、相違する言葉が・・・口を開けば開くほど、出てきてしまう。

——本当に彼女なの？

——だったら別れてよ。

そんなの・・・ただの嫉妬にしか、なっていない。

——もっと私を、見てよ。

——なんで私じゃないの？

八つ当たりにか・・・なっていない。

——なんで、八つ当たりするんだろう。

それが・・・本意に対しての、唯一の疑問。

——どうして、弟みたいに想ってきた大輝に対して・・・こんな感情を抱くの？

『嫉妬』『訳の分からない八つ当たり』

それらは、『弟みたいに想ってきた大輝』という経緯を辿って・・・その先は・・・

——ハナレタクナイ・・・ソバニイテホシイ。

そんな、叶え難い『独占欲』

——ああ、私は・・・

自分でも気づかないうちに・・・

大輝を、弟として見ていなかった。

代わりに・・・“男”という代名詞に当てはめていた。

当てはめていたはずの場所からは、遂に抜け出せなくなっていた・・・

——それくらい、私は・・・

彼は、カラオケでの事件で、唯一助けてくれた人。

彼は、あの雨の日に・・・あのことで、約束を思い出させてくれた人。

彼は、誰よりも長く一緒にいてくれた人。

『ずっと、一緒だよ。』

そんな約束を交わした相手。

ただの、子供染みた約束だった。

でも今は・・・想いの糸の先に繋げる、大事な、大事な約束。

無口だけど、たまに子供っぽい大輝。

家電音痴で、洗濯機ぶっ壊した大輝。

幼少時代、部屋に閉じ籠ったまま、ベビーシッターにも手を焼かせてた大輝。

——そんな・・・どんな大輝も・・・

愛しい。

気づかないうちに、変化してた。

『弟』みたいな『二従兄妹』から・・・『男』として『愛しい』存在になっていること。

気づかないうちに、変化してた。

年齢を重ねるごとに、線を延ばしていた比例のグラフ。

気づかないうちに、変化してた。

気持ちとは反比例して、どんどん想いが膨張していったこと。

それらに気づくと・・・込み上げてくるのは・・・

『嫉妬』『羞恥心』

その2つを隠すため・・・美輝は今も、壊れたように2人のことを喋る。息が続く限り。

「本当、あのまま2人ほっとけばよかった――・・・」

涙が、目から零れ落ちる瞬間・・・大輝は、美輝の手首が押し折れるかと思うほど強く掴んで、

「――ふざけんな、テメエ。」

低く、黒い渦を卷いたような声を出した。

と同時に、美輝の顎を指で上げて・・・

声を遮断させるかのように、そっと・・・でも強く、自分の唇と、美輝の唇を・・・重ねた。

丘のすぐ下では・・・色とりどりのイルミネーションが、電灯が途絶えるまで自分の存在をありったけに示している。

第14話〈イルミネーションの今宵〉（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜明日壁ノ丘〜

作者「・・・ちよつとKYな裏コント、今日もOPEN!」

拓海「で、この話に直接関係ない俺を起用したわけだ・・・」

作者「だって美輝、あんたのことひとかけらも思い出してないじゃん。」

拓海「・・・（無念）」

作者「まあまあ。これも現実っていうことで。さて、明日壁ノ丘って、どういう丘でしょうか？答えてください拓海君。」

拓海「・・・知らねーし、んなもん。」

作者「それじゃダメ！テキストでいいからひとつぐらい答えろ。」

拓海「・・・明日の壁？の丘？」

作者「・・・ヤベェ大正解・・・」

ついでに、明日壁ノ丘のジンクス・・・この丘に登ると、明日に壁ができる・・・ということ。

まあ、所詮ジンクスはジンクスだし・・・問題ナッシング？（笑）

第15話〈相違からの・・・〉

——相違からの、言葉だった。

——相違からの、衝動だった。

2人が同時にそう思った時、唇が離れた。

「・・・え？」

10秒前後あったが、一瞬の出来事としか捉えようがなく、美輝は間拔けた言葉を出す。

・・・いや、正確には間拔けた「フリ」をした言葉。

自分をじつと捉えている大輝の目。逸らすにも・・・逸らし様がない。逸らせれない。

その目が・・・何かを、訴えているかのように見えたから。

その訴えを、何とかして感じ取りたかったから。

数秒見つめあった後、大輝は美輝の背中に腕を回し、その小さい体を折れるかと思うほどの力で抱き締める。

その力は・・・あの、梅雨の日の出来事。それを再現したような、もしくはそれよりも大きい力。

「・・・悪^{ワリ}イ。俺、どーかしてる・・・」

抱き締めたまま、自嘲を含めたような言葉を発する大輝。

そう。

『彼女を傷つけない。』

『傷つかせても、自分を見て欲しい。』

相違する、ふたつの心の叫びが入り混じった声。

相違からの、何かを訴えかけるかのようなキス。

相違からの衝動。

ただ単に、自分と美久が“そうなっている”と疑われているのが嫌だ、という、誰にだって向けられる感情も、彼の中にあった。

だけど・・・それ以上に、美輝が・・・どこかで、悲しい表情をしているのかと思った。

それが、思い込みであろうと、なかろうと・・・衝動に勝つことは、なくて。

——勝れない俺が・・・ダサイ。

だけど、それが本意だった。そのふたつの心の叫びが。

ダサかろうと、どうだろうと・・・自分に嘘は、つけない。

「ゴメン、私も・・・めっちゃ思っていないことばっか言っただし・・・」

抱き締められて、上手く発声ができないのか・・・くぐもった声で、一生懸命声を出す美輝。

『嫉妬』と『羞恥心』

2つを隠す為の・・・言葉。

類似からの言葉。

『彼の幸せなら、彼と美久を羨んであげたい。』
『彼の幸せであろうと、やはり美久が恨めしい。』

相違する、“羨”と“恨”。

相違からの、強がり言葉。

相違からの言葉。

改めてよく見たら、この人は大輝とお似合いだと思う。
でも・・・そのことを聞いている大輝は・・・どこか、悲しそうな
顔をしていた。

——そんなことすら気付けれなかった私が・・・情けない。

気づけなかった。“美久を消したい”というどす黒い衝動を抑える
ため、精一杯だった。

精一杯だった・・・はずなのに。

今、この現状に、素直に心臓は反応している。

つまりは・・・彼女の心臓は、鼓動を、どんどん増している。

増しすぎて・・・誰よりも今、近くにいる大輝の想いにさえ、気づ
けなかった。

数秒の沈黙を経て、大輝が大きな溜息をしたのが美輝にも分かった。

「ほんっと、餓鬼^{ガキ}だな、俺・・・」

そう言いながら、そっと美輝の体を離す。

美輝はおずおずと大輝を上目遣いで見た。

そんな彼女の目を見つめ、彼は再び自嘲を含めた笑みを浮かべた。

「ゴメンな、いきなりあんなこととして——気色悪かったろ？」

『キシヨクワルカッタロ？』

すんなりと、何食わぬ声で言ったこの彼の言葉が・・・美輝の頭の中を、黒い渦を巻いて澱み合う。

言葉が、渦に飲み込まれる寸前に・・・その言葉が、叫んだ。

『二従兄妹』っていう、現実を。変え難い、現実を。受け止めならなきゃならない、現実を。

そうだった・・・大輝は、二従兄妹なのだ。身内でもなければ、全くの赤の他人でもない。そんな、曖昧な位置にいる。

いや、曖昧な位置にいたから・・・“だからこそ”なのか・・・届きそうでトドカナイ、そんな彼にいつしか恋をしていたのだ。

それも、現実。

もう、融通利かない・・・制御が利かない。

利かないからこそ・・・今、溢れようとしている。

「・・・そんな訳、ないよ・・・」

美輝は、そんな否定の言葉を、目を逸らしながら呟いた。

「・・・なんで？」

同様、彼も目を逸らしながら・・・でもしつかりと問い質す。
口調は冷静であつても・・・心臓は、今にも破裂しそうだった。

彼女の一言が、彼女自身の、“自分自身”の気持ちを全てを物語っていたようだったから。

物語ってしまえば・・・結論は、2人次第。

「だって、私・・・」

・・・美輝は、そこで口を噤んでしまった。

言ったら・・・どうなる？
元の関係は・・・どうなる？

『不安』『想い』

渦を巻きながら、交差する。

「・・・やっぱ言えない。」

伏せ目がちになりながら、結局口にすることを中断してしまった。
そんな美輝の頭を、大輝はふっと笑みを浮かべながら軽く叩いた。

「美輝らしい。」

大輝の言葉に、美輝は疑問符ばかりを頭に反映させながら顔を上げた。

大輝は今でも、優しい笑みを浮かべている。

——本当、コイツらしいな。

そんなことを、思い浮かべながら。

「だって、言ったら最後・・・二従兄妹としては、見れなくなる・・・」

それは、いつの間にか・・・大輝を、二従兄妹として見ないようとしてきた“努力”の表れなのか・・・

「二従兄妹っていう、ちょっと薄いけど・・・確かに、どこかで繋がってる証・・・失いたくない・・・」

なんだかんだ言っても、ゆくゆくは「離れたくない」っていうエゴ。「なんでもいいから、繋がってたい」という、いい加減な要望。「一緒にいたい」っていう・・・ネガイ。

糸先に見えた愛しいと想う“愛”は・・・それらを、全部丸ごと包み込んだ罪深き言葉。

それを一瞬でも思い浮かべたところで、襲ってくるのは膨大な“罪悪感”。

愛情を持ってしまった・・・罪悪感。

・・・そんなこと、分かってるのに・・・

“それ”を滅ぼす術は、1つしか見当たらなかった。

「――そばにいてほしいから・・・ずっと一緒にいたいから・・・」

“伝えること”

想っていた言葉を、口に出して、声に出して、言葉にして伝えること。

思い浮かんだ・・・唯一の、罪滅ぼし。

――ああ、離間はもう・・・益々離れてしまいうんだろうな。

悲しさを覚えながら・・・静かに、美輝は目を伏せた。

第15話く相違からの・・・く（後書き）

『比例×反比例』裏コントく最終回もうすぐく

作者「・・・ということ、ますますKYになりつつある裏コント、開幕でございます・・・」

恵美「てか私最近、出番少ないよっ！」

作者「あゝ、ゴメンゴメン。憶えてますか？みなさん。恵夢の姉の、恵美さんです。」

恵美「どもどもく・・・って、あんま嬉しくない・・・」

作者「まあさて置き。最終回が近づいて参りました。多分、登場キヤラ約10人ぐらいの未来を描いた後、終わる・・・かな？」

恵美「うわぁ。なんかありきたり・・・」

作者「まあ待てメグさん。そんな作者がいちばん気にしてることを言わないでください・・・（涙）」

恵美「まあそゆことなんで、最終回まで見届けてやってくださいねく！」

作者「うわぁ、なんかスнгеエ上から目線・・・」

・・・ということで、最終回までどうぞ、宜しくです！

第16話〈軌跡・奇跡〉

自分たちが7歳の頃・・・最も幸せで、最も辛かった時。

大輝の父・・・拓哉が、欲望がままに美輝の母である麗沙にキスした。

その現場を、偶然大輝の母である美咲、美輝の父である翔一郎が目の当たりをして――一氣に、未来を決めた。

拓哉と美咲は、その後・・・深夜の交通事故で事故死。

麗沙と翔一郎は、距離を作り始めた。

そんな『オトナの四角関係』『Square heart』

それは・・・幼い美輝と大輝にも、影響を及ぼした。

両親の事故死に、心を閉ざした大輝。

そんな大輝を、何とかして導き出そうとする美輝。

そんな2人は・・・グラフの原点となる、ある“約束”で、より一層信頼を深めた。

『ずっと一緒』

途轍もなく純真無垢な、幼い、小さな約束。

でも、変容することなく・・・今でも、活き続けている。

そしてその約束はいつしか・・・お互いの存在とともに『心の拠所』となっていた。

でも、伝え合わない・・・現状。

そうなっている間にも・・・時間は、足を止めないでいた。

2人の比例のグラフが、大きく変化したのは・・・拓海が存在であった。

今思えば、拓海は2人の関係を大幅に変化させる“起爆性”だったのかもしれない。

カラオケ事件で・・・美輝の、大輝に対する想いが、着実に変化していたのであった。

ただの『二従兄妹』とは表し難い——そんな変化。

やがて、その変化は・・・大輝の行動によって、色鮮やかに反映された。

大輝が、自分を抱き締めた時に感じた・・・体温。それによって・・・あの約束を、思い出したのだった。

それから、自分では気づけないほど想いは膨張していき・・・結果・

『ハナレタクナイ。ソバニイテホシイ。』

大輝に対して、そう思うようになってきた。

やがてそれは・・・今の、感情に繋がっている。・・・糸先に繋がる言葉。

悲しいこと。辛いこと。幸せなこと。嬉しかったこと・・・それが、軌跡。

全部全部、カガヤイテイタ。輝いていた。“美”しく“輝”いていた。“大”きく“輝”いていた・・・

「・・・俺も。」

驚いたように、見開いた目を細め、大輝はそう言う。

「——美輝には、離れてほしくない。」

それは、暗に・・・『心の拠所』を表現していて。

——大輝も、同じ気持ちでいてくれた・・・

堪らない、『嬉しさ』、『幸せ』・・・
そんな感情は、涙となって止め処なく溢れ出す。

「み、美輝？どうした？やっぱキモ・・・」
「ち、違う！めっちゃ嬉しくて・・・」

慌てて前言撤回をしようとする大輝を抑え、美輝は素直な想いを口にする。

——伝えるってことは・・・幸せなことなんだな。

『ずっと一緒』

そんな、幼い想いを伝えた時・・・大輝は、幸せな気持ちになっていたのかな？

そんな疑問にさえ・・・明確な答えが出せれそうな気がして、ならないほど・・・

幸せ。

この言葉だけに収まりきれないほど・・・

イルミネーションを眺めながら・・・美輝はひっそりと想っていた。

——軌跡が生み出した、奇跡なのかな・・・

約束や事件などの軌跡が生み出した・・・『二従兄妹』から、『コイビット』に変わった奇跡。

どっちみち、2つのキセキに感謝しながら・・・

「恋人同士になるんだったら、早起きは絶対条件だよ？」

「そりゃ無理。」

他愛もない会話をしながら、ずっとイルミネーションを眺めていた。

第16話〈軌跡・奇跡〉（後書き）

『比例×反比例』裏コント〜G R e e e N〜

作者「さて、今回の題材・・・キセキ（軌跡・奇跡）は、G R e e e Nの『キセキ』を参考とさせていただきました！」

拓海「で？」

作者「・・・（で？ってオイ。）『キセキ』は、私が最近ハマってる曲で・・・」

拓海「それが？お前の趣味なんざ蚊以下だし。」

作者「・・・（ったくムカつくし！コイツ！）拓海君よ、なぜそんな不機嫌なんです？」

拓海「っせえ黙れ。」

作者「・・・」

拓海が荒んだ理由は・・・今後明らかになるでしょう（^{スサ}^^;）でも、ほんと『キセキ』はいいですよ♪聞いてみる価値アリアリです！

第17話〈比例×反比例〉

大分肌寒くなってきたため、2人は名残り惜しさが残る思いで、明日壁丘を下りて、ホテルに向かった。

ちなみに美久はジェットで強制にホテルに送還。ダミーはもう必要ナシなのでジェット側で処分した。

ホテルに着いてからは、恵夢やその他の女子たちに「どこ行つたの!？」っていう質問攻めの嵐。

美輝はなんも変哲のない表情で

「ちょっとねえ。他のクラスの友だちのどこ行つただけだよ」

そう軽くあしらつても・・・尚も続く質問攻め。

あしらい続け、気づけば・・・辺りは、寝息に包まれていた。

それからは、難なく旅行が進みに進んで・・・

「な～んか、あつと言う間だね・・・」

帰りの機内・・・恵夢は、名残り惜しそうにそう呟く。

「う～ん・・・」

そんな呟きに相反する想いを抱いていた美輝は、曖昧な相槌を打った。

——いろいろあったよなあ・・・

拓海との再会。

拓海の新カノの謎。

美久との初対面。

大輝との付き合いの始まり。

最高に幸せだったキス。

ダミーの世話・・・

美輝の頭の中には、限らないほど、2泊3日のたくさんの出来事が
思い浮かんだ。

中でも、最高に幸せだったことは、大輝との付き合いが始まったこ
と・・・

——スキナヒトと付き合えるって、こんなにも嬉しいことなんだ。

“二従兄妹”という関係でありながら、好きな人というには少し抵
抗があったが——関係がどうであれ、意思には無縁。

“二従兄妹”という関係・・・血のつながりが、とても薄い。そん
な中で、2人は出逢い、約束を交わし、擦れ違い、結ばれた。

擦れ違った間は・・・想いが隠れて、見つけれなかった。

でも、だからこそ気づけたのだろうか・・・“かくれんぼ”してい
る想いに、必死に気づきたくて、いつのまにか・・・気づいてた。
気づかされていた。

気づかされてくれたのは・・・全て、日数と周りの比例から。意思
と動悸の反比例から・・・

それらが重ねに重なり・・・格子点が、打たれた。

今では素直に、その現状を受け止めれる。

——幸せ。

そうとさえ、難なく言える。

美輝は飛行機の窓から見える、限らない雲や空に目を向けた。
心の中で、そっとお礼を言いながら・・・

——大輝に出逢わせてくれて、恋する気持ちに出逢わせてくれて、
ありがとう。

両親に。

亡き大輝の両親に。
神様に。

——「ずっと一緒だよ。」

そんな約束によってつくられた、比例のグラフに。反比例のグラフ
に。

普通なら、「どうでもいい」と言って放棄するであろうグラフの直
線を、2人とも伸ばしに伸ばしたのは・・・共通する想いがあった
からなのだろうか・・・

それくらい、2人は想い合っている。

幾年経っても、絶えることなく・・・

こっから先は、変わり者な“神楽美輝”の“神楽美輝”に当てた手紙。

普通、自分が自分に当てる手紙は未来の自分にあてるものなのだが・
・何故かこいつは、過去の自分に書いてしまっている。

「なんで過去のお前なんざに手紙書くわけ？」

風呂上りの、首にタオルをかけた少年・・いや、いつしか青年と化した男が、年甲斐もなくワンピースを着ている美輝にそう問う。

「なんざって何！？なんざってえ！」

「はいはい。えゝ、どれどれゝ・・・」

顔を近づけて、内容を見ようとした男の目の前から、美輝は急いで手紙を隠して

「大輝は見ちゃダメッ！」

男の名前を叫び、また年甲斐もなく舌を出した。

“大輝”は、また息を吐くと・・・

「じゃ、俺にも何枚か紙ちょうだいや。」

紙を何枚か取って、傍にあるペンを取って何かをサラサラと書き綴った。

「・・・大輝って、昔っから書くスピード速いよねゝ。頭のスピードは無駄に遅いくせにゝ」

「うっせえ。」

そう言い、額を軽く小突く大輝の手を押さえ、美輝は幸せそうに微笑んだ。

「ヒロのバカッ！」

とびきりの、満面の、幸せそのものの笑顔で・・・

ヒロ

そう呼んでた頃。

大輝

そう呼び始めた頃。

2つの頃の、自分に当てた手紙。

第18話〈過去の自分へのLetter〉

Dear 神楽美輝

チヨリーツス☆（へ皿へ）V

初めて年甲斐もなくユツキーナ語をつかいました！25歳の神楽美輝です！

あなたぐらいの私には想像できないだろうけど・・・今、私大輝と結婚してるんだ。そんでね・・・っと。それはここだけの秘密で。

もしかしてあなたぐらいの私は、大輝と結婚したいって思ってるのかな？うーん、私は忘れちゃったな（笑）

でもね、毎日が大輝のおかげでめっちゃ楽しかったことは憶えてる。だって今、そうでしょ？

大輝が洗濯機ぶっ壊して、思いつ切りばかにしたあの日。

大輝がPCの遣い方忘れちゃって、思いつ切りばかにしたあの日。

・大輝がアイロンで火傷しちゃって、思いつ切りばかにしたあの日・

って、ばかにしまくりだし（笑）

今のうちに謝っといてえ・・・（泣）

あ、この前・・・といっても、随分前・・・高2のくらいかな？

旅行から帰って来た時ね、私が、

「やっぱ日数に比例して想いが強くなってたのかな。」

って呟いたらね、大輝が

「いや、俺の場合比例なんかしてねえけど？」

そう答えたんだ。

もしかして、私もそうかも（笑）

でも、やっぱ最初は“友だち”“二従兄妹”としか見てなかったな。

それが、比例することになって、だんだん“スキナヒト”になって
って、“コイビト”になったんだよね。

その比例のグラフ、今は大切に心にしまっただけあるんだ。

格子点を中心にしたグラフを築き上げちゃったから。

今、無駄な人生送ってるなんて思わないでね。

その無駄な日々って、いつか大切なものになるんだから。保証でき
る！うん！

そんじゃ、あなたが今の私になるまで、バイバイ♪

P. S. 拓海の彼女の件なんだけど、ワイドショーであったんだけど、お母さんと同じ名前だったみたい。

もう、ほんとにあの時はビックリしたなあ（笑）

From 神楽美輝

Dear 神楽大輝

ありがとう。

今、伝えたいのはその言葉だ。

美輝から告白（遠回しの？）された時・・・正直、突き放そうって思った。俺の想いを。美輝の想いを。

二従兄妹同士で付き合うという現状にさらされた時に、周りからの非難が咄嗟に思い浮かんだから。

でも、そんな周りを気にする気なんか、俺の想いに対して薄っすらとしか姿を現さなくて。

もしもあの時、両方の想いを突き放したとしたら・・・今の俺はなかっただろう。今の美輝はいなかっただろう。

とにかく、ありがとう。幸せな未来を作り上げてくれて。

今俺は、その築き上げられた幸せな未来を、いちばん大切な人と過ごしてる。

その大切な人は・・・無論、美輝。

友だち想いで、俺よりも頭脳明晰で、言動行動ひとつひとつが子供っぽくて、何に対しても前向き。

そんな美輝が、好きだ。

散々家電音痴な俺を馬鹿にして、別の男と性行為（の序盤）するし、美久っていう女見た途端、気い狂ったようにマシンガントーク始めるし。

・・・そんな美輝も、好きだ。

そして何よりも好きなのが、美輝の笑顔だ。まるで太陽みたいな・

つと、ノロケはここまでにしておき（笑）

想いが通じ合うって、すげえことなんだな。

スキナヒトと付き合えるって、結婚できるって、すげえ嬉しくて、幸せで・・・

そんな“今”をくれた17歳ぐらいの大輝、ほんとにありがとうな。

恩返しに、今の俺はこれから先の“未来”の幸せを願うよ。

・・・きっと、未来の俺も、更にこれから先の“未来”の幸せを願うと思う。

F
r
o
m

神楽大輝

最終話〜月光〜

2人が同時にペンを置いた時・・・どこの部屋からか、途轍もなく大きな泣き声が聞こえてきた。

「やだ、輝姫^{テルキ}、また夜泣き!？」

輝姫という名を呼び、美輝は立ち上がってその部屋へと向かった。後から、大輝も手紙をポケットに入れながら美輝の後をつく。

大輝が部屋に着いた頃には、美輝が輝姫を懸命にあやしていた。

「どうしよお大輝い・・・輝姫、なかなか泣き止まないの・・・」

半泣きで潤んだ目で、美輝は大輝に助けを求めた。

大輝は、少し溜息を吐くと・・・

「“母さん”が泣いてどーすんだよ。輝姫に笑われるぞ？」

微笑を交え、美輝の涙を指で拭って輝姫をそっと抱き上げた。

大輝が、輝姫の頭を撫でると・・・瞬時に、輝姫は元のようにリズミカルな寝息を立て始める。

「・・・なんで大輝が抱っこすると泣き止むんだろう・・・」
「さあね。」

大輝は曖昧な返事をして、輝姫をベッドに寝かす。

カグラテルキ
神楽輝姫。美輝と大輝の間に生まれた、2人にとって、かけがえの

ない、大切な、大切な、宝物。宝人。

「あ……」

美輝は、大輝の立つ場所から見える、夜空を煌々と照らす月に気づいた。

窓越しでも分かるくらい、煌々とした、眩い光。

「もしかして、月の光で？」

「やっと気づいたか。」

大輝は呆れたようにそう言い、窓から月を見上げる。
つられて美輝も、同じように月を見上げる。

「綺麗だねえ……」

美輝は、あまりもの月の美しさに嘆息を漏らした。

そんな美輝の傍で、大輝が思い浮かべるのは……やはり、あの手紙にも記した内容。

近くにいるようで、遠くに行ってしまった……そんな時期。拓海と美輝が付き合っていた時代。

……もしかしたら、拓海の立場が、自分に当たってしまうかもしれない。

想いを交わした明日壁丘にちなみ……明日に、壁ができてしまうかもしれない。

そんなことは……嫌だった。何がなんでも、傍に居て欲しい。

青年と化した・・・でも、心はまだ少年のままの彼は、ポケットの中の紙を握り締めた。

「・・・なあ、美輝。」

「ん？」

「好きだから、もう離れるなよ？」

そう、離れて欲しくなかった。傍に居て欲しいのだ。

両親を一度に失った・・・そんな心の空白を埋めてくれた、たった1人の人だったからだ。
ベビーシッターでもない。クラスメイトでもない。ましてや美久でもない・・・美輝だから、離れて欲しくなかった。

美輝の目から、涙が1粒零れた。

「・・・もしかして、また嫌？」

そんな美輝の目を見て、大輝は驚いたような目をして、美輝の涙を再度拭った。

彼女は、首を横に振って・・・

「ううん・・・嬉しかった。だって大輝、初めて好きって言ってくれたもん・・・」

そう言って見せた美輝の笑顔は・・・大輝には、美しく輝いていて。月光の下。再度交わされた想いは・・・もう、比例に惑わされない。反比例なんかしない。

“ 思い出 ” として、残されるから。

『 比例 × 反比例 』 完結。

最終話〜月光〜（後書き）

作者「遂に！遂に最終回です！てか3話一気に書き上げました・・・ヘトヘトです・・・」

美輝「それはいいーから、早くしてよっ！」

作者「おっとゴメン。実は今、今作品に登場してきたキャラたちが揃っております！ではみなさん、一言ずつどうぞ！って、最初はやっぱ・・・」

拓海「よっす！麗沙とやりまくってる拓海だ！今までどうもサンキューー！」

恵夢「フラ○チェンマスコットにハマッてる恵夢です。誰か、フラ○チェンファンクラブの一員に・・・」

恵美「んなことどうでもいいっしょ！出番少なかった恵美です！今は自分の飲食店作って働いてます！これからも頑張りますよ！」

恵夢「まあいろいろとありがとうございました。」

瞬理「お姉ちゃんたち、なんか堅苦しいよぉ〜？」

麗沙「美輝の母の麗沙です。どうもありがとうございました。」

翔一郎「1人だけ名前が長ったらしい美輝の父です。まあどうも。」

美久「もっと大輝とイチャつきたかった〜！」

ダミー「アキラメロ。アンタモトカラミヤクナシ。」

美久「ヒドッ！」

作者「・・・まあ、他にもまだまだ居ますが・・・時間が時間なんで、もうここで打ち上げです。」

美輝「ちよっと待ったあ！」

大輝「肝心の俺等挨拶してねーじゃん。」

作者「おっとゴメンよヒロイン&ヒーロー！さあ、締めの一言！」

美輝「えゝ、まあとにかくお騒がせしました！」

大輝「どうもな。」

作者「短っ！^{ミジカ}」

えゝ、作者からは・・・ズタズタな展開&誤字脱字&文章力0のお
かげで読みにくかったこの作品、読んでくださってありがとうございます
이었습니다！またこれからもよろしくお願いします！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2441e/>

比例×反比例～格子点2～

2010年11月10日10時48分発行